

# 中道遺跡

国道118号袋田バイパス道路改築  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

茨城県教育財団文化財調査報告第445集

中道遺跡

公益財団法人茨城県教育財団

令和2年3月

茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所  
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第445集

# 中道遺跡

国道118号袋田バイパス道路改築  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和2年3月

茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所  
公益財団法人茨城県教育財団



## 序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所による国道118号袋田バイパス道路改築事業に伴って実施した、大子町中道遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、平安時代の竪穴建物跡や土坑などが確認でき、当時の集落の様相が明らかになりました。本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所に対して厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、大子町教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和2年3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 小野 寺 俊



## 例 言

- 1 本書は、茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成29年度に発掘調査を実施した、茨城県久慈郡大子町大字南田気字中道218-1番地ほかに所在する中道遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。  
調査 平成29年9月1日～12月28日  
整理 令和元年12月1日～令和2年3月31日
- 3 発掘調査は、副参事兼調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。  
首席調査員兼班長 胸澤悦郎  
次席調査員 三浦裕介  
調査員 見越広幸
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長皆川修のもと、次席調査員三浦裕介が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、出土した石材の鑑定については、茨城大学名誉教授田切美智雄氏にご指導いただいた。
- 6 第2号竪穴建物跡から出土した金属製品2点（紡錘車、不明鉄製品）、第3号竪穴建物跡から出土した金属製品1点（紡錘車）、第19号土坑から出土した金属製品1点（紡錘車）、第20号土坑から出土した金属製品1点（紡軸）、第97号土坑から出土した金属製品1点（不明鉄製品）の保存処理については、埋蔵文化財の保存処理いしかわに委託した。
- 7 本遺跡の出土遺物及び実測図・写真等は、茨城県埋蔵文化財センターにて保管されている。

# 凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = + 84,560 \text{ m}$ 、 $Y = + 48,200 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A、B、C…、西から東へ 1、2、3… とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a、b、c…j、西から東へ 1、2、3、…0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1 区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SB - 掘立柱建物跡 SI - 竪穴建物跡 SK - 土坑

土層 K - 攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 600 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 焼土・施軸	 炉・火床面・被熱範囲・黒色処理
 竈部材・炭化物範囲・粘土範囲	 罍
● 土器 ○ 土製品 □ 石器・礫 △ 金属製品	

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は cm、g で示した。なお、現存値は ( ) を、推定値は [ ] を付して示した。

(2) 遺物番号は遺構ごとの通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

(3) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

- 6 竪穴建物跡の「主軸」は、竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

- 7 今回の報告分で、整理の段階で遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更 SK38・56 ~ 60・63 → SB 1、SK100・101・104 ~ 106・108 → SB 2

欠番 SK92・124・127

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
中道遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	8
第1節 調査の概要	8
第2節 基本層序	8
第3節 遺構と遺物	11
1 平安時代の遺構と遺物	11
(1) 竪穴建物跡	11
(2) 掘立柱建物跡	38
(3) 土 坑	41
2 その他の遺構と遺物	52
(1) 土 坑	52
(2) 遺構外出土遺物	56
第4節 総 括	57
写真図版	PL 1～PL16
抄 録	





## なかみち 中道遺跡の概要

### 遺跡の位置と調査の目的

中道遺跡は、大子町の中央部を流れる久慈川右岸の標高96mの河岸段丘上に位置しています。今回の調査は、当遺跡が国道118号袋田バイパス道路改築事業地内に所在することから、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するために、公益財団法人茨城県教育財団が平成29年度に4,273㎡について発掘調査を実施しました。



### 調査の内容

調査によって、平安時代の<sup>たてあな</sup>竪穴建物跡10棟、<sup>ほったてばしら</sup>掘立柱建物跡2棟、<sup>どこう</sup>土坑17基、時期不明の土坑99基を確認しました。当遺跡は久慈川沿いの下位河岸段丘上に営まれた平安時代の集落跡であることが分かりました。注目されるのは、竪穴建物跡の<sup>かまど</sup>竈の<sup>えんどうぶ</sup>煙道部が細長いこと、東壁に竈が付設されていること、竈に加えて<sup>へいせつ</sup>炉が併設されていることなどが挙げられます。



調査区遠景（東から）



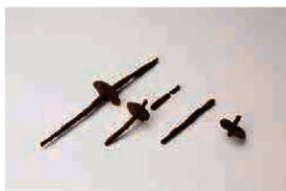
伏せられた状態で出土した高台付椀  
(第6号竪穴建物跡出土)



第2号竪穴建物跡調査風景



高台付椀の内側から合わせ口で出土した小皿  
(第6号竪穴建物跡出土)



出土した4点の鉄製紡錘車

## 調査の成果

当遺跡で確認できた平安時代の竪穴建物跡の竈は、東壁に付設されていることや煙道部が屋外へ長いこと、構築材として、花崗岩や砂岩などの久慈川流域や八溝山系で産出される石材を用いていることなどの特徴があります。本県域で確認されている竈よりも、東北地方南部によくみられる特徴で、この地域が、「陸奥国白河郡依土」に属していたことを裏付けています。

また、竈と炉を併せ持つ竪穴建物跡が6棟確認できたことや鉄製紡錘車が4点出土していることから、集落内で製糸作業を行っていた可能性が考えられます。

当遺跡と隣接する橋元遺跡とは、共通点が多く見られることから、同一の集落であったと考えられます。久慈川右岸に形成された、わずかに広がる下位河岸段丘面で、平安時代に営まれた集落の盛衰をうかがい知ることができました。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所は、大子町大字南田気において、交通の円滑化をはかるため国道118号袋田バイパス道路改築事業を進めている。

平成16年4月19日、茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、国道118号袋田バイパス道路改築事業における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成16年6月4日に現地踏査を行い、平成16年11月1・2・4・5日、平成16年12月2・3日に試掘調査を実施した。平成16年12月22日、茨城県教育委員会教育長は茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所長あてに、事業地内に中道遺跡が存在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成29年3月16日、茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条に基づき、土木工事のため埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。平成29年3月23日、茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所長あてに工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成29年3月24日、茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、国道118号袋田バイパス道路改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成29年3月25日、茨城県教育委員会教育長は茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所長あてに、中道遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として、公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成29年9月1日から12月28日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 調査経過

中道遺跡の調査は、平成29年9月1日から12月28日までの4か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程		期間			
		9月	10月	11月	12月
調査表遺	準備 土除 構確 去認	■		■	
遺構	調査	■			
遺物 注写	洗浄 整理	■			
撤	取				■

## 第2章 位置と環境

### 第1節 位置と地形

中道遺跡は、茨城県大子町大字南田<sup>南田</sup>気字中道218番地の1ほかに所在している。

大子町は、北は福島県、西は栃木県に接する茨城県北西端の町である。地形的には、町の中央には北から南へ久慈川が流れ、その東側には生瀬盆地と久慈山地の断崖地形があり、西側には南北にのびる八溝山地などがある。久慈川の流域地形は、北部から八溝川、押川、滝川の合流によってつくり出された氾濫原や河岸段丘が広く発達し、大子盆地を形成している。盆地南端の袋田から川下<sup>川下</sup>間の穿入蛇行区域にかけても河岸段丘が発達し、川下以南はほぼ直線的な峡谷地形となる。

久慈川の河岸段丘は、洪積世時代（200万年前～1万年前）に堆積した洪積世堆積物と、沖積世時代（1万年前～現在）に堆積した沖積世堆積物からなり、両堆積物はどちらも砂礫と粘土などから構成されている。大きく区分すると上位段丘、中段段丘、下位段丘の三段に分けることができる。上位段丘は、下流から、西金橋本、南田気の中腹などが該当し、断片的に分布する丘陵地形である。中段段丘は、下流から、所谷、南田気、北田気などの平坦面に分布している。下位段丘は、久慈川の河床からの比高が小さく、久慈川流路に接近している平坦面であり、上位、中段の段丘に比べて関東ローム層の厚さが非常に薄いのが特徴になっている。

当遺跡は、久慈川が大きく蛇行し舌状に張り出した下位段丘の北側で、中段段丘崖下から久慈川までの幅330mの平坦地に位置する。河床からの比高は8mほどで、標高は約96mである。当遺跡南に広がる中段段丘面では関東ローム層が確認できるが、調査区内では確認できなかった。調査前の現況は畑地と水田である。

### 第2節 歴史的環境

大子町域は久慈川とその支流の広がりにより水利に恵まれていることから、古代から人々が生活を営む場となってきた。大子町域には、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在しているが、特に縄文時代と奈良・平安時代の遺跡が多く確認されている。ここでは、当遺跡周辺の遺跡を中心に概観していく。

旧石器時代の遺跡は確認されていないが、昭和58年に仲山古墳群の調査を行った際に、古墳造営時に削られた関東ローム層上部から、頁岩の薄片が出土しているので、旧石器時代にここで人が生活していたことがわかる<sup>1)</sup>。

縄文時代の遺跡は、約80か所ある<sup>2)</sup>。早・前期の遺跡は久慈川本流に沿った丘陵上にみられる傾向があり、中・後期の遺跡は久慈川支流の押川流域に多くみられる。早期の遺跡として、本遺跡の南に位置する内久根遺跡<sup>(2)</sup>、茅山式の土器片が出土している堂平遺跡などがある。前期の遺跡は、黒浜式の土器片が出土している番城内遺跡<sup>3)</sup>〈7〉、関山式・黒浜式の土器片が出土している塩の平遺跡などがある。中期の遺跡は、大木8a式、加曾利EⅠ式の土器片が出土している塙平C遺跡<sup>4)</sup>や、阿玉台式、加曾利EⅠ・Ⅱ式の土器片が出土している西境田遺跡、また、鯉節形の硬玉製大珠が出土している日の上遺跡などがある。後期の遺跡としては、加曾利BⅠ式の土器片が出土している橋元遺跡<sup>5)</sup>〈3〉や、土偶の右脚部や石棒、掘之内式・加曾利B式の土器片などが出土している後谷津遺跡、蛇身形裝飾付土器の破片が出土している川西遺跡<sup>6)</sup>などがある。

大子地方に弥生文化が伝播するのは、弥生時代中期後半である。当遺跡周辺の弥生時代の遺跡は、番城内遺

跡、小屋原遺跡〈14〉などがある。また、奥久慈懸いの森の入り口辺りから、弥生時代後期の壺形土器が単独で出土している<sup>7)</sup>。

古墳時代の茨城県域は、多珂(高)国、久慈(久自)国、那賀(仲)国、茨城国、新治国、筑波国の6つの国に分かれ、各々に国造が置かれていた<sup>8)</sup>。大子地方がこの6国のなかの久慈国に含まれていたのか、現在の福島県域にあたる白河国に含まれていたのかは不明である<sup>9)</sup>。古墳時代前期の五領式土器は、今のところ確認されていない。5世紀前半に位置づけられる和泉式土器は下野宮遺跡から出土している<sup>10)</sup>。当遺跡周辺の古墳時代の遺跡としては橋元遺跡などがある。

奈良・平安時代の大子地方は、930年に編纂された『和名類聚抄』に記載されている「陸奥国白河郡依上」に属していたと考えられている<sup>11)</sup>。「依上」<sup>12)</sup>は、「藤」のちに「保」として、陸奥国白河郡から高野郡下に属していた。当遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡としては、久慈川下流に位置する番城内遺跡があり、9世紀後半～11世紀前半にかけての堅穴建物跡13棟、土坑2基が確認されている。また、橋元遺跡では9世紀後半～11世紀後半にかけての堅穴建物跡37棟、鍛冶工房跡1棟、掘立柱建物跡1棟などが確認されている<sup>13)</sup>。その他、当遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡には、中津原平遺跡〈5〉、大塩遺跡〈6〉、岩木遺跡〈8〉、内久根遺跡、前坪南遺跡〈11〉、前坪北遺跡〈12〉、後坪遺跡〈13〉、小屋原遺跡、馬場南遺跡〈15〉、馬場中遺跡〈16〉、馬場北遺跡〈17〉、塙平C遺跡、上ノ内南遺跡〈18〉などがある。

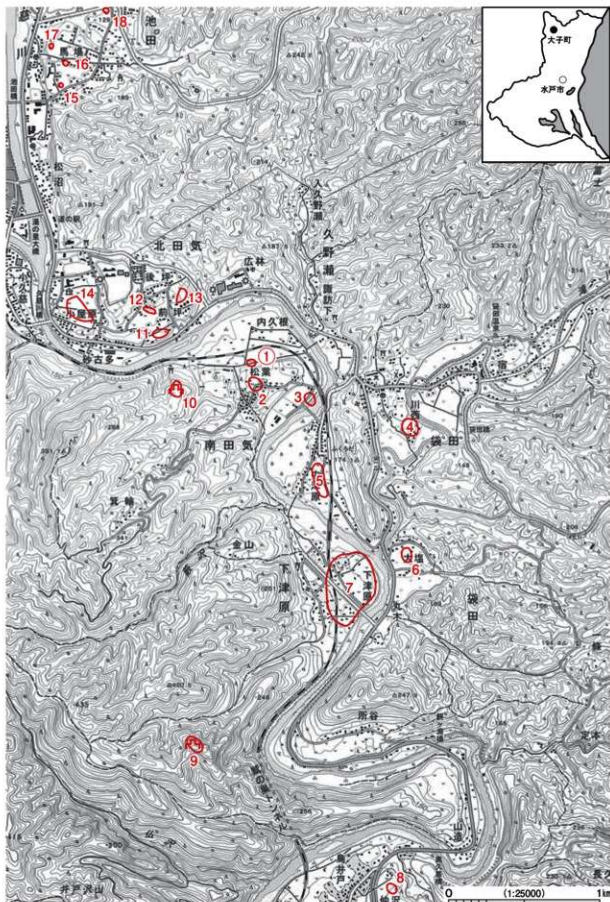
中世は、白河結城氏や岩城氏、芦名氏、伊達氏、佐竹氏の勢力の狭間で攻防が繰り返されたため、多くの城館跡が残っている。その多くは、山頂を切り崩した山城や、舌状台地に堀を設けるなど、山や川の自然条件を生かしたものである。橋元遺跡では13世紀後葉～14世紀前葉にかけての掘立柱建物跡1棟、方形堅穴遺構6基などが確認されている。その他、当遺跡周辺の中世の遺跡としては、下津原要害跡〈9〉、天神山城跡〈10〉が挙げられる。中世から近世の遺跡としては、礎石3個や根石および掘え穴30か所からなる礎石建物跡が確認された宝泉寺跡<sup>14)</sup>がある。

16世紀になると佐竹氏の勢力が伸張して、白河結城氏をおさえ、依上保も佐竹氏の支配下におかれた。佐竹氏は、豊臣政権を背景として依上保内で金の採掘に力を入れ、常陸と陸奥南部に勢力を拡張した佐竹義宣は、文禄4年(1595)の当地方の太閤検地の結果、秀吉から54万5800石の所領を安堵された。依上保は太閤検地以後、陸奥国高野郡から常陸国久慈郡に編入されたとみられ<sup>15)</sup>、400年近い歳月を経た現在もなお、大子町一円が保内郷の呼称で親しまれている。

※ 文中の〈 〉の番号は、第1図及び表1中の該当遺跡番号と同じである。

#### 註

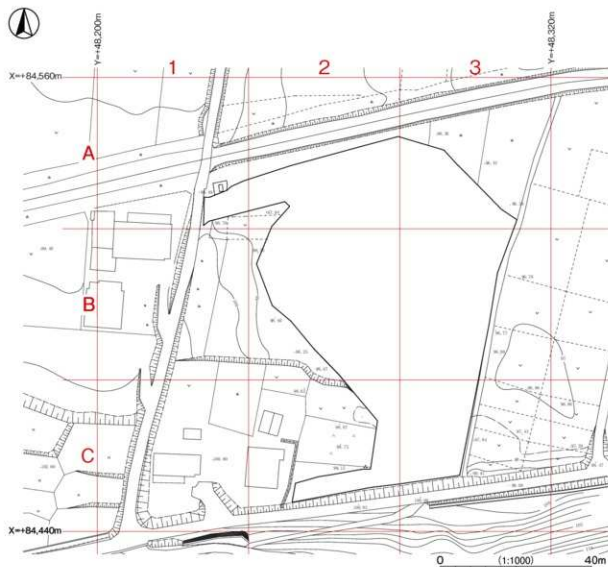
- 1) 大子町史編さん委員会『大子町史』通史編 上巻 大子町 1988年3月
- 2) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2009年3月
- 3) 柴田博行『一般国道118号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書 番城内遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告書 第126集 1997年6月
- 4) 千種重樹『常陸大子 塙平C遺跡』大子町教育委員会 1995年9月
- 5) 長津盛男『橋元遺跡 国道118号袋田バイパス道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告書 第36集 2012年3月
- 6) 註1に同じ
- 7) 茨城地方史研究会編『茨城の歴史 県北編』茨城新聞社 2002年5月
- 8) 大子町史編さん委員会『大子町史 写真集』大子町 1980年12月
- 9) 註3に同じ
- 10) 註3に同じ
- 11) 註3に同じ
- 12) 註4に同じ
- 13) 註5に同じ
- 14) 月山武考古学研究所『宝泉寺跡』大子町教育委員会 1992年3月
- 15) 瀬谷義彦『那珂・久慈・多賀の歴史』郷土出版社 2004年11月



第1図 中道遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院 25,000分の1「大子」「袋田」「大中宿」「常陸大沢」)

表1 中道遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安			鎌倉・室町	江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町
①	中道遺跡					○		10	天神山城跡						○	
2	内久根遺跡	○				○		11	前坪南遺跡	○				○		
3	橋元遺跡	○		○		○		12	前坪北遺跡					○		
4	岡平遺跡	○						13	後坪遺跡	○				○		
5	中津原平遺跡					○		14	小屋原遺跡	○	○			○		
6	大塩遺跡	○				○		15	馬場南遺跡					○		
7	番城内遺跡	○	○	○		○		16	馬場中遺跡	○				○		
8	岩木遺跡	○				○		17	馬場北遺跡					○		
9	下津原要害跡						○	18	上ノ内南遺跡	○				○		



第2図 中道遺跡調査区設定図



## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

中道遺跡は、大子町の中央部に位置し、久慈川右岸の標高約96mの河岸段丘上に立地している。遺跡の地形は、段丘崖と久慈川の間に広がる段丘面で、砂礫を含む粘土層が広がり、自然流路跡などが確認できる。調査面積は4273㎡で、調査前の現況は田畑である。

調査の結果、竪穴建物跡10棟（平安時代）、掘立柱建物跡2棟（平安時代）、土坑116基（平安時代17、時期不明99）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に40箱出土している。主な遺物は、土師器（坏・高台付坏・高台付碗・小皿・鉢・甕・小形甕・甌）、須恵器（甕）、灰釉陶器（広口壺・短頸壺・甌類）、緑釉陶器（甌類）、土製品（管状土錘）、石器（砥石・磨石）、金属製品（紡錘車・刀子・釘）などである。

### 第2節 基本層序

調査区は下位段丘面の標高95～99mの間に位置しており、調査区北部（TP1・A3e1区）、西部（TP2・B2i6区）にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った。TP2は、調査区際壁面で自然流路跡が確認できた箇所に設定した。調査区南に位置している南のボーリング結果<sup>1)</sup>を参照すると、砂・シルト粒子の層に相当する。遺構は、第5層の上面で確認した。

以下、観察結果から層序を説明する。調査区のある下位段丘面は8層（1～8）に分層できる。

第1層は、暗褐色を呈する粘土層である。細礫を少量含む。粘性・締まりとも強い。層厚は16～39cmである。

第2層は、暗褐色を呈する粘土層である。細礫を中量、砂を微量含む。粘性・締まりとも強い。層厚は9～20cmである。

第3層は、黒褐色を呈する粘土層である。細礫を少量、粘土粒子を微量含む。粘性・締まりとも強い。層厚は8～25cmである。

第4層は、褐灰色を呈する粘土層である。鉄分を中量、細礫を少量含む。粘性・締まりとも強い。層厚は18～38cmである。

第5層は、にぶい黄褐色を呈する粘土層である。粘土粒子、鉄分を微量含む。粘性は強く、締まりは普通である。層厚は27～55cmである。

第6層は、褐色を呈する粘土層である。粘土粒子を微量含む。粘性は強く、締まりは普通である。層厚は16～35cmである。

第7層は、暗褐色を呈する粘土層である。細礫を少量、粘土粒子を極めて微量含む。粘性・締まりとも強い。層厚は下層が未掘のため不明である。

第8層は、褐色を呈する粘土層である。鉄分を微量、粘土粒子を極めて微量含む。粘性は強く、締まりは普通である。層厚は下層が未掘のため不明である。

西部（B2i6区）テストピットは自然流路の断面を含む。第①～④層は、自然流路の覆土である。

第①層は、にぶい黄褐色を呈する砂礫層である。細礫を少量含む。粘性・締まりとも弱い。

第②層は、にぶい黄褐色を呈する砂礫層である。細礫を少量、中礫を微量含む。粘性・締まりとも弱い。

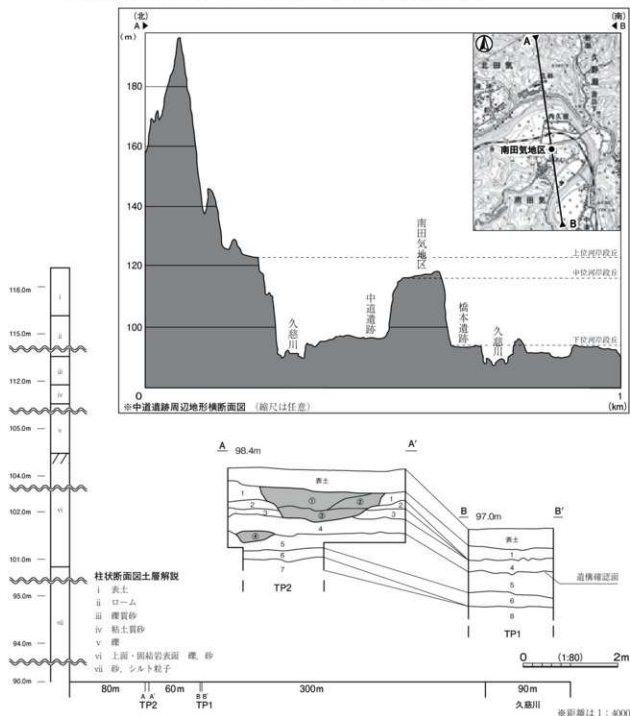
第③層は、灰黄褐色を呈する砂礫層である。小礫を微量含む。粘性・締まりとも弱い。

第④層は、暗褐色を呈する砂礫層である。小礫を中量、中礫を少量含む。粘性・締まりとも弱い。第④層の自然流路は遺構確認面を確認でき、同じ高さで第10号竪穴建物跡を削平している自然流路もあるため、10世紀中葉よりも新しい時期にできた流路と考えられる。第①～③層はさらに新しい時代にできた流路となる。

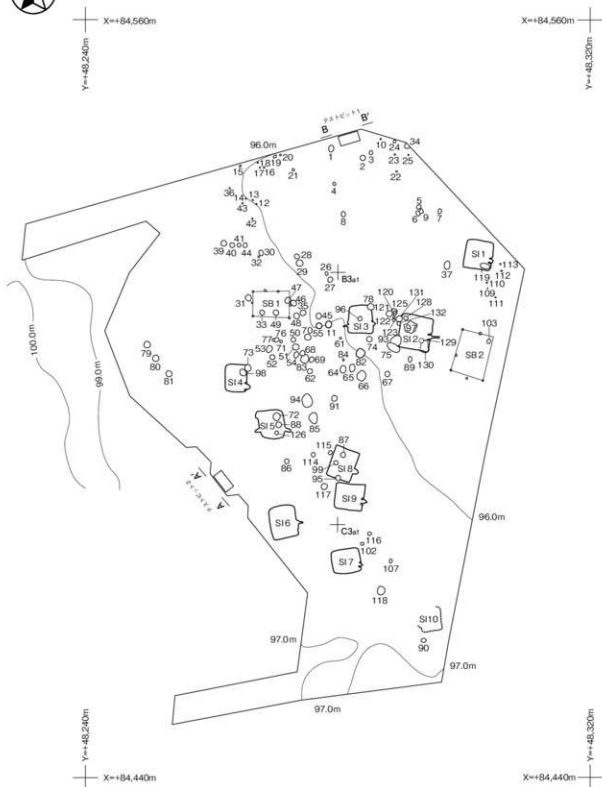
註

1) 「大子・喜連川 表層地質図」「土地分類基本調査」茨城県農地局農地計画課 2003年3月

※ 駒澤悦郎・見越広幸「茨城県北部における関東ローム層の層序区分について」『研究ノート』第15号 公益財団法人茨城県教育財団 2018年10月 (第1・2図を改変し、中道遺跡周辺地形横断面図で使用)



第3図 中道遺跡基本土層図



第4図 中道遺跡調査遺構全体図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡10棟、掘立柱建物跡2棟、土坑17基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

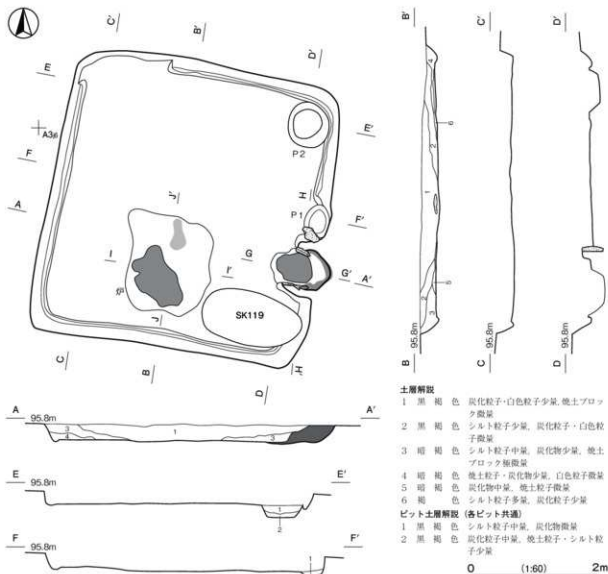
##### (1) 竪穴建物跡

##### 第1号竪穴建物跡（第5～7図 PL.3）

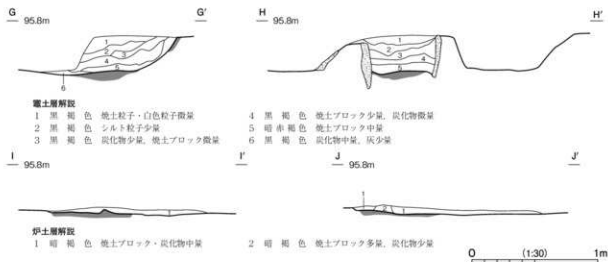
**位置** 調査区北部のA316区、標高95.6mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

**重複関係** 第119号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.56m、短軸4.36mの方形で、主軸方向はN-99°-Eである。壁は高さ25cmで、外傾している。



第5図 第1号竪穴建物跡実測図(1)



第6図 第1号竈穴建物跡実測図(2)

**床** 平坦で硬化面は確認できない。壁下には壁溝が巡っている。

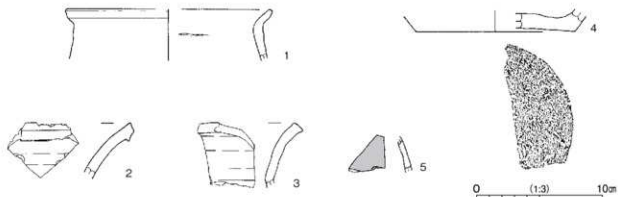
**竈** 東壁の南寄りに付設されている。規模は焚口部から燃焼部奥壁まで95cmで、燃焼部幅は48cmである。地山を掘り残して袖部とし、両袖の内壁際を20cmほど掘りくぼめ、構築材として板状の砂岩2点・凝灰角礫岩2点を据えている。竈構築材は竈袖部内壁から3点、外壁から1点出土している。外壁の石材は、火を受けた痕跡があるため内壁に使用されたものと考えられる。また、竈外から構築材が出土していることから、人為的に竈は壊している。火床面は、床面と同じ高さの地山面で、焼土は厚さ7cmである。燃焼部奥壁は、壁外へ32cm掘り込まれ外傾している。第1層から第4層は流入土、第5層は焼土ブロックが多く天井部及び内壁の崩落土、第6層は炭化物と灰を含み締まりの緩い土であることから、灰の掻き出し土と考えられる。

**炉** 中央部南側に位置している。長径150cm、短径123cmの不定形で、床面をそのまま使用した地床炉である。  
**ピット** 2か所。P1は長径50cm、短径35cmの楕円形で、深さ8cmである。P2は長径71cm、短径64cmの楕円形で、深さ20cmである。ともに性格は不明である。

**覆土** 6層に分層できる。流れ込みによる自然堆積である。

**遺物出土状況** 土師器片136点(坏類48、甕類88)、須恵器片12点(甕類)、灰釉陶器片1点(瓶類)、碟4点、被熱礫23点(竈構築材5、総重量29.257g)が出土している。2はP2の覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から10世紀前葉と考えられる。



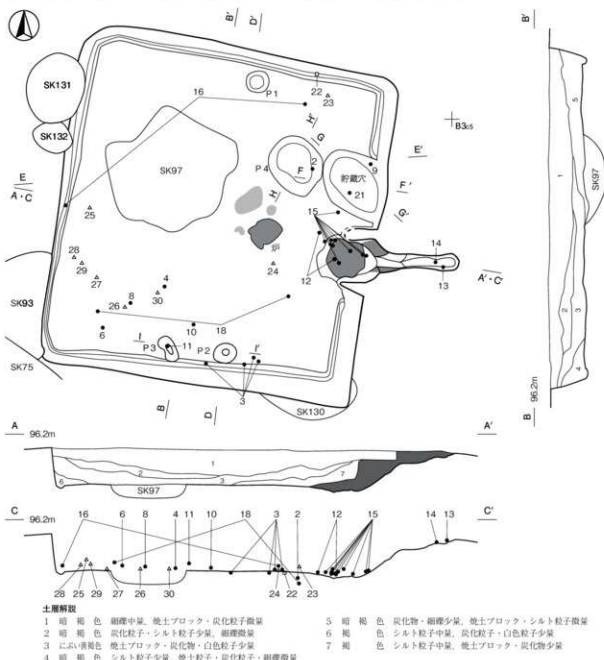
第7図 第1号竈穴建物跡出土遺物実測図

第1号竪穴建物跡出土物観察表 (第7図)

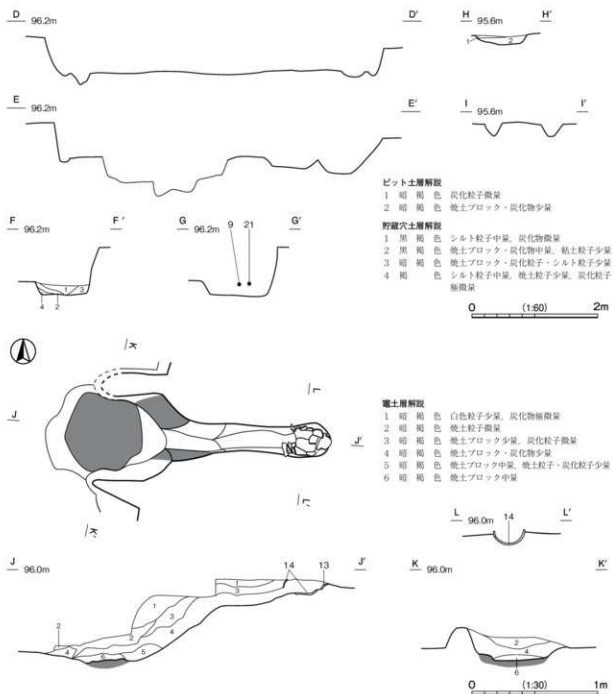
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師部	甕	[163]	(4.1)	—	長石・石英・雲母 にふいね	灰	普通	口縁部横ナデ	覆土中	5%
2	須恵部	甕	—	(4.9)	—	長石・石英	灰	良好	口縁部外・内面ナデ	P 2 覆土中	5%
3	須恵部	甕	—	(5.3)	—	長石・石英	灰	良好	口縁部外・内面ナデ	覆土中	5%
4	須恵部	甕	—	(1.7)	[127]	長石・石英・赤色粒子	灰黄	普通	体部外面へラ張り 内面ナデ	覆土中	5%
5	灰釉陶器	瓶型	—	(2.9)	—	長石・石英	灰黄緑	普通	体部内面ロタロナデ 外面輪軸	覆土中	5% 埋没産

第2号竪穴建物跡 (第8～13図 PL 4・5)

位置 調査区中央部のB 3b3区、標高95.9mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。



第8図 第2号竪穴建物跡実測図 (1)



第9図 第2号竈穴建物跡実測図(2)

**重複関係** 第128～130号土坑を掘り込み、第93・131・132号土坑に掘り込まれている。第97号土坑は、第2号竈穴建物跡の断面に掘り込んだ痕跡がなかったこと、床面の高さで締まりがなく建物跡の床面としては機能していなかったことから、第2号竈穴建物が廃絶された後、埋没する前に掘り込まれた土坑である。

**規模と形状** 長軸5.41m、短軸5.20mの方形で、主軸方向はN-94°-Eである。壁は高さ40～55cmで、外傾している。

**床** 平坦で硬化面は確認できない。壁下には壁溝が巡っている。

**竈** 東壁のやや南寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで225cm、燃焼部幅は55cmである。地山を掘り残して袖部としている。火床面は床面から16cmくぼみ、焼土は厚さ5cmである。煙道部は壁外へ細

長く130cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。煙道部先端には、土師器の甕が横位で連結され埋め込まれている。はじめに第5・6層の焼土ブロックが多く含まれている天井部及び内壁が崩落し、次に第4層が流れ込み、最後に第1～3層が崩落している。

**炉** 中央部の東側に位置している。長径50cm、短径35cmの不定形で、床面をそのまま使用した地床炉である。

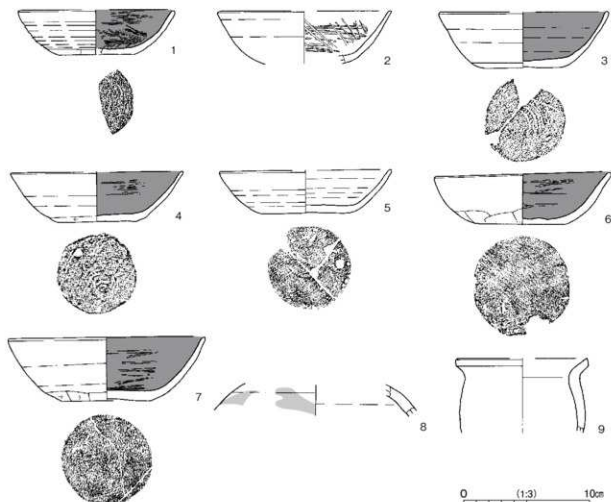
**ピット** 4か所。P1は径35cmの円形で、深さ10cmである。P2は径35cmの円形で、深さ20cmである。P3は長径40cm、短径20cmの楕円形で、深さ20cmである。P4は長径95cm、短径70cmの楕円形で、深さ15cmである。P1・P2は南北で対になることから主柱穴である。P3・P4の性格は不明である。

**貯蔵穴** 東壁際の竈北側に位置している。長径115cm、短径85cmの楕円形で、深さ15cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 7層に分層できる。流れ込みによる自然堆積である。流れ込みの覆土のため遺構プランを明確にするため、トレンチを入れ、全体を10cmほど掘り下げてプランを確定した。

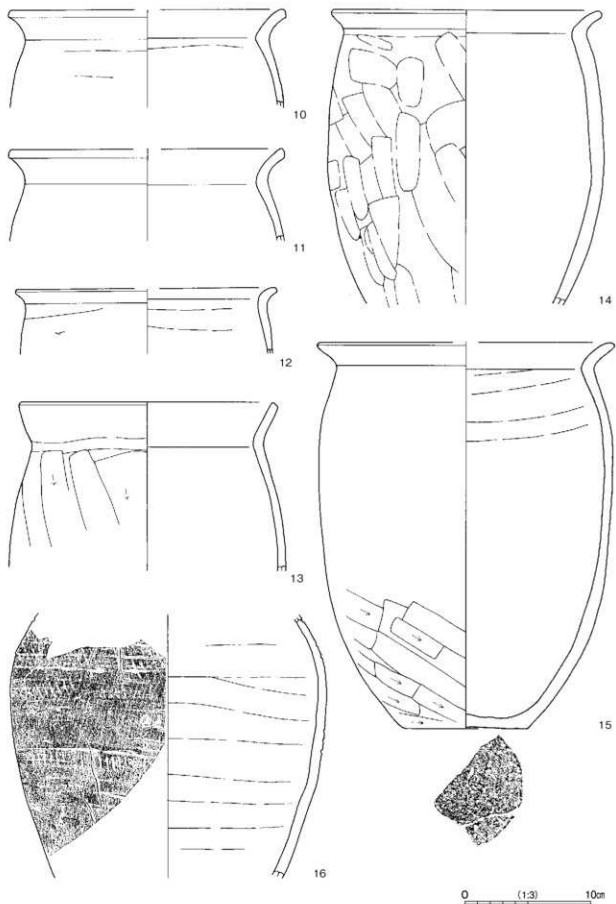
**遺物出土状況** 土師器片1,226点(坏類223、椀1、高台付坏6、鉢2、甕類994)、須恵器片29点(甕類)、緑釉陶器片1点(瓶類)、石器1点(砥石)、金属製品8点(刀子2、紡錘車1、釘4、不明鉄製品1)、礫29点(総重量6,818g)、被熱礫12点(総重量9,290g)、鉄滓1点(169,87g)が出土している。13・14は煙道部先端から底部を先端部に向け連結した状態で出土している。23は覆土下層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から10世紀前葉と考えられる。

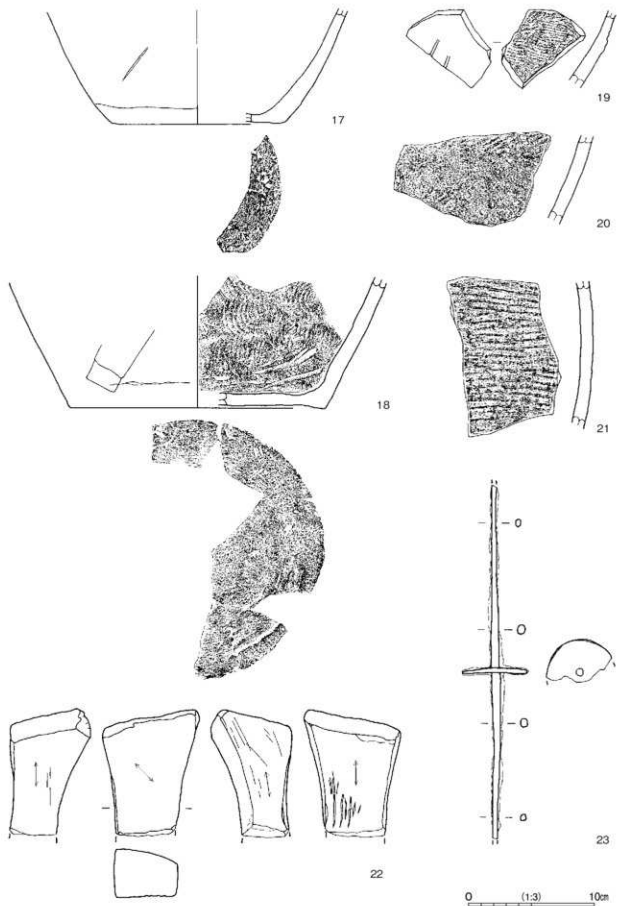


第10図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)

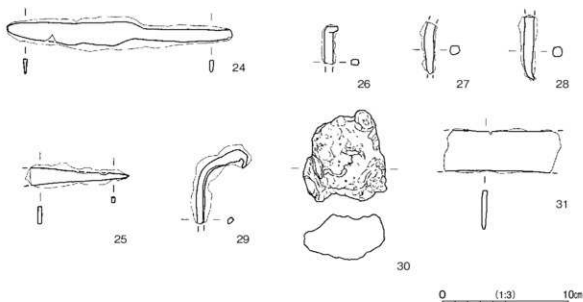




第11图 第2号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)



第12图 第2号竖穴建物跡出土遺物実測图(3)



第13図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図(4)

第2号竪穴建物跡出土遺物観察表(第10～13図)

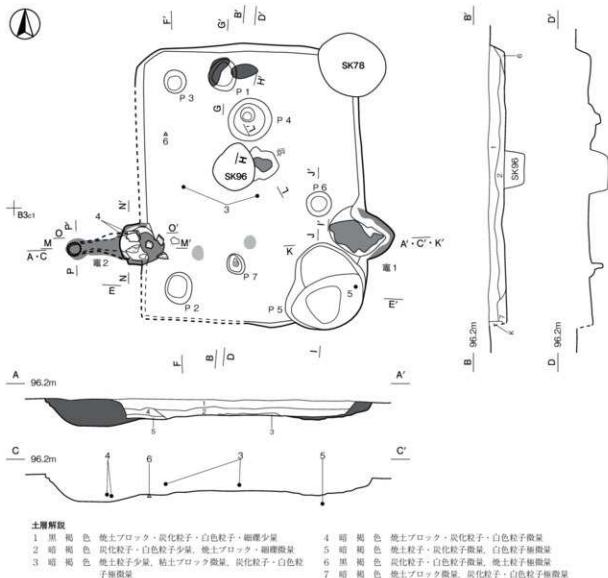
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[123]	3.5	[60]	長石・石英・雲母	にぶい青	普通	体部外面口ロナテ 内面へう磨き。黒色処理	覆土中	20%
2	土師器	坏	[138]	(4.2)	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい青	普通	体部外面口ロナテ 内面へう磨き	P4覆土下層	30% PL10
3	土師器	坏	[134]	4.5	6.3	長石・石英	にぶい青	普通	体部外面口ロナテ 内面へう磨き。黒色処理 底部回転糸切り後へう磨り。磨減が著しい。	床面	40%
4	土師器	坏	[127]	4.0	6.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい青	普通	体部外面口ロナテ 内面へう磨き。黒色処理 底部回転糸切り後へう磨り。内面磨減が著しい。	床面	40%
5	土師器	坏	[136]	3.4	6.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい青	普通	体部外・内面口ロナテ 底部回転糸切り後へう磨り。磨減が著しい。	覆土中	40% PL10
6	土師器	坏	140	4.3	7.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい青	普通	体部外面下端へう磨り。内面へう磨きを残す。黒色処理。磨減が著しい。	床面	100% PL10
7	土師器	輪	15.6	5.1	7.1	長石・石英・赤色粒子	灰	普通	体部外面口ロナテ。下端へう磨り。内面へう磨き。黒色処理。底部回転糸切り後へう磨り。	覆覆土中	60% PL10
8	緑釉陶器	甌	—	(2.5)	—	細骨	灰	普通	体部外・内面口ロナテ 外面施釉	床面	5% 産地不明
9	土師器	甕	[104]	(5.9)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい青	普通	口縁部横ナテ	貯蔵穴 覆土上層	5% 5%
10	土師器	甕	[218]	(7.8)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい青	普通	口縁部外・内面ナテ	床面	5% 11と同一
11	土師器	甕	[216]	(7.3)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい青	普通	口縁部外・内面ナテ	覆土下層	5% 10と同一
12	土師器	甕	[205]	(5.2)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子・黒色粒子	灰白・灰黒	普通	口縁部外・内面ナテ	床面	5%
13	土師器	甕	202	(13.4)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい青	普通	口縁部横ナテ 体部外面へう磨り	蔵埋遺部	20% PL12
14	土師器	甕	209	(23.4)	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい青	普通	口縁部横ナテ 体部外面ナテ	蔵埋遺部	50% PL12
15	土師器	甕	[210]	30.6	[100]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい青	普通	体部外面へう磨り。内面ヘラナテ	蔵埋土中層	20% PL12
16	須恵器	甕	—	(21.0)	—	長石・黒色粒子	灰白	良好	体部外面傾位の平行叩き後ヘラナテ 内面口ロナテ	覆土下層	10% PL15
17	須恵器	甕	—	(9.1)	[136]	長石・石英	褐灰	普通	体部下端へう磨り	覆土中	10%
18	須恵器	甕	—	(10.5)	[204]	長石・石英・黒色粒子	褐灰	良好	体部内面同心円状の尙具痕。下端ヘラナテ	覆土下層	30% PL13
19	須恵器	甕	—	(6.2)	—	長石・石英	黄灰	良好	体部内面尙具痕 外面自然軸付着	覆土中	5%
20	須恵器	甕	—	(7.4)	—	長石・石英	褐灰	普通	体部外面傾位の平行叩き	覆土中	5%
21	須恵器	甕	—	(12.7)	—	長石・石英・細骨	灰	普通	体部外面傾位の平行叩き 内面指頭圧痕	貯蔵穴 覆土上層	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
22	砥石	(100)	7.2	6.5	(300.4)	凝灰岩	砥面4面 片側端部折れ(反対は自然砥理面)			床面	PL15
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
23	紡輪車	(280)	05～08	0.3	(46.7)	鉄	紡輪部外径56cm。孔径0.6cm 紡輪部1/2欠損 紡輪両端欠損。			覆土下層	PL16
24	刀子	18.0	1.9	0.3	(41.19)	鉄	刃部断面三角形 柄部断面台形 両側			床面	PL15

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
25	刀子。	(7.3)	04~15	0.3	(26.07)	鉄	刃部欠損 柄部断面方形	覆土下層	
26	釘	(3.0)	0.5~1.1	0.5	(6.79)	鉄	端部を折り曲げ頭部とする巻回釘 断面0.6×0.4cmの方形 先端部欠損	床面	
27	釘。	(4.0)	0.9	0.7	(12.73)	鉄	断面0.9×0.7cmの方形 頭部・先端部欠損	床面	
28	釘。	(5.0)	0.8	0.8	(13.71)	鉄	断面0.8×0.8cmの方形 頭部欠損 先端部は曲がる	覆土下層	
29	釘	(5.8)	0.5~1.4	0.5	(32.73)	鉄	端部をつ折り曲げ頭部とする巻回釘 断面0.5×0.4cmの方形 先端部欠損	覆土下層	
30	鉄滓	7.3	6.7	3.6	109.87	鉄	底面碗状 発色 着磁性微弱	覆土下層	
31	不明鉄製品	(9.4)	3.3	0.4	(38.90)	鉄	板状 断面3.3×0.4cmの方形 両端部欠損	覆土中	

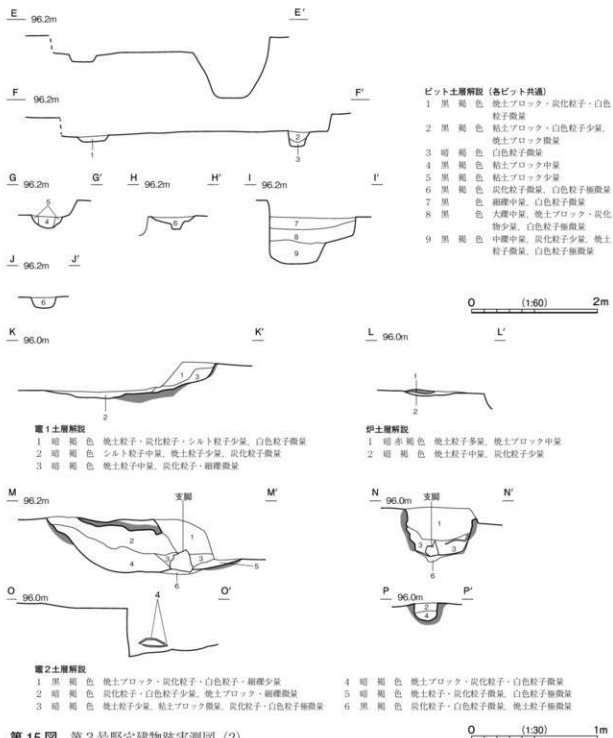
### 第3号竪穴建物跡 (第14~16図 PL.5)

位置 調査区中央部のB3b1区、標高95.9mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

重複関係 第78・96号土坑に掘り込まれている。第96号土坑は、第3号竪穴建物跡の断面に掘り込んだ痕跡



第14図 第3号竪穴建物跡実測図(1)

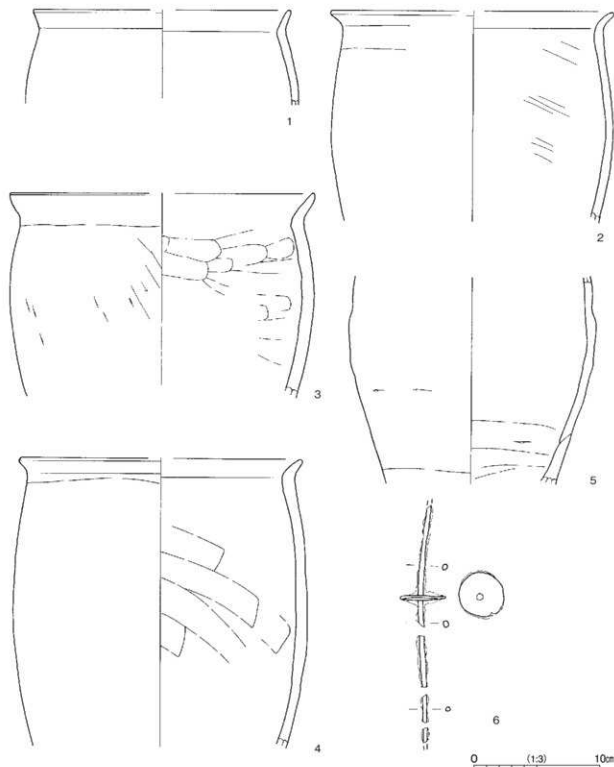


がなかったこと、炬を掘り込んでいることから、第3号竪穴建物の廃絶後、埋没前に掘り込まれた土坑である。  
**規模と形状** 長軸4.46m, 短軸3.96mの長方形で、主軸方向はN-90°-Wである。壁は高さ15~27cmで、外傾している。

**床** 平坦である。硬化面は確認できなかった。

**竈** 2か所。竈1は東壁の南寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで100cm, 燃焼部幅は60cmである。地山を掘り残して袖部としている可能性があるが確認できなかった。火床面は床面から5cmくぼみ、焼土は厚さ8cmである。煙道部は壁外へ45cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第1・3

層は竈解体後に建物の壁として構築されている可能性がある。竈2は西壁の南寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで155cm、燃焼部幅は50cmである。地山を掘り残して袖部としている。火床面は床面から10cmくほみ、焼土は厚さ5cmである。火床部奥側には支脚と考えられる石が据えられている。煙道部は支脚より奥側が残存しており、壁外へ110cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。煙道部や支脚が残存しており、建物廃絶時まで使用していたと考えられる。第3・4層が流れ込み、竈天井部と思われる第



第16図 第3号竪穴建物跡出土遺物実測図

1層が崩壊し第2層が流れ込んでいる。竈1の解体後、竈2が構築されていると考えられ、併存していない。

**炉** 中央部東側に位置している。長径50cm、短径45cmの楕円形で、床面を10cm掘りくぼめ使用している。

**ピット** 7か所。P1は長径50cm、短径42cmの楕円形で、深さ20cmである。P2は長径50cm、短径45cmの楕円形で、深さ10cmである。P3は径35cmの円形で、深さ25cmである。P4は径68cmの円形で、深さ20cmである。P5は長径140cm、短径135cmの不定形で、深さ55cmである。P6は径40cmの円形で、深さ20cmである。P7は長径35cm、短径30cmの楕円形で、深さ25cmである。P5は貯蔵穴の可能性が高い。竈構築材が出土していることから、竈1廃絶に伴い埋め戻されたと考えられる。他のピットの性格は不明である。

**覆土** 7層に分層できる。流れ込みによる自然堆積である。流れ込みのため、第1層は地山との見分けが難しかったため、トレンチを入れ平面形のプランを確定した。

**遺物出土状況** 土師器片241点(坏類17,高台付坏5,高台部1,甕類218),須恵器片3点(甕類),土製品2点(羽口),金属製品1点(紡錘車),礫13点(総重量21,117g),被熱礫33点(支脚1,総重量34,627g)が出土している。3は覆土下層,4は竈2覆土下層,6は床面から紡錘車が折れた状態で出土している。

**所見** 時期は、出土土器から10世紀前葉と考えられる。

### 第3号竪穴建物跡出土遺物観察表(第16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	甕	[204]	(76)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	覆土中	5%
2	土師器	甕	[226]	(170)	—	長石・石英・細礫	橙	普通	口縁部横ナデ	覆土中	20% PL14
3	土師器	甕	[246]	(164)	—	長石・石英・赤色粘土	灰褐色	普通	口縁部横ナデ 体部内面ヘラナデ	覆土下層	10%
4	土師器	甕	[225]	(233)	—	長石・石英・細礫	橙	普通	口縁部横ナデ 体部内面ヘラナデ	竈2覆土下層	20% PL12
5	土師器	甕	—	(167)	—	長石・石英・細礫	橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ 内面ヘラナデ	P5覆土中層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
6	紡錘車	(19.1)	0.4-0.5	0.4	(25.73)	鉄	紡錘部外径37cm、孔径0.5cm 紡錘部一部欠損 紡錘折れ、両部欠損	床面	PL16

### 第4号竪穴建物跡(第17～19図 PL6)

**位置** 調査区中央部のB2d6区、標高962mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

**重複関係** 第73・98号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.36m、短軸3.40mの長方形で、主軸方向はN-92°-Eである。壁は高さ8～14cmで、外傾している。

**床** 平坦である。硬化面は確認できなかった。

**竈** 東壁の南端に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで155cm、燃焼部幅は60cmである。両袖部は壊されて、袖部跡から構築材を据えたピットが確認できた。燃焼部の焼土は厚さ5cmである。煙道部は壁外へ65cm掘り込まれ、燃焼部から外傾して立ち上がっている。第1・2層は袖部で使用されたシルト粒子を多く含む覆土で天井部及び内壁の崩壊土である。燃焼部中央が5cmくぼみ、焼土が途切れていることから支脚が据えられていた可能性がある。掘方調査によって両袖部に石材を据えていたピットが確認できた。どちらも石材は抜き取られている。

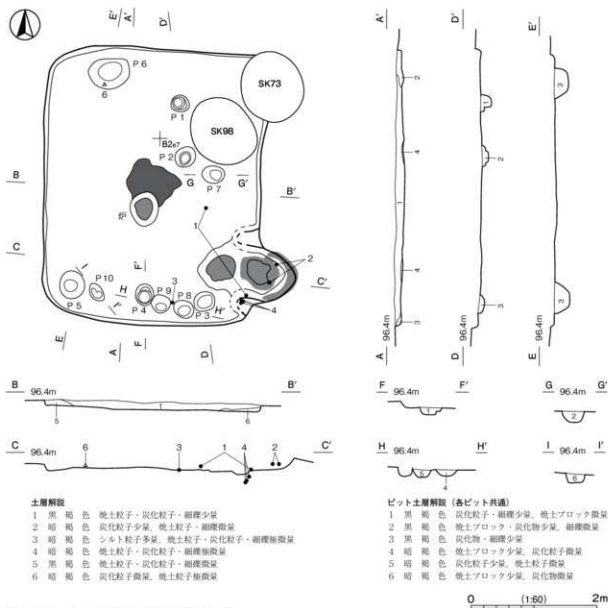
**炉** 中央部に位置している。長径50cm、短径45cmの楕円形で、床面をそのまま使用した地床炉である。炉の北側には掻き出された炭化物が90×50cmの範囲で確認できた。

ピット 10か所。P 1 は径30cmの円形で、深さ16cmである。P 2 は径35cmの円形で、深さ10cmである。P 3 は長径35cm、短径30cmの楕円形で、深さは8cmである。P 4 は長径35cm、短径30cmの楕円形で、深さ10cmである。P 5 は長径45cm、短径40cmの楕円形で、深さ25cmである。P 6 は長径63cm、短径48cmの楕円形で、深さ24cmである。P 7 は長径35cm、短径30cmの楕円形で、深さ16cmである。P 8 は長径32cm、短径25cmの楕円形で、深さ8cmである。P 9 は径30cmの円形で、深さ13cmである。P 10 は長径30cm、短径20cmの楕円形で、深さ12cmである。P 1・P 2、P 5・P 6は南北でそれぞれ対になることから主柱穴と考えられるが、形状や位置などから併存していないと考えられる。他のピットの性格は不明である。

**覆土** 6層に分層できる。自然堆積である。

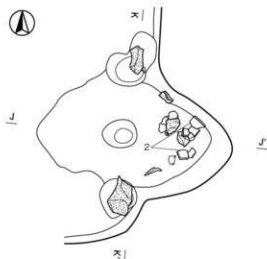
**遺物出土状況** 土師器片123点(坏類26、高台付坏3、高台部1、鉢2、甕類91)、須恵器片1点(甕類)、石器1点(磨石)、金属製品2点(不明鉄製品)、鏝3点(総重量4872g)、被熱礫18点(総重量17,365g)が出土している。2は竈覆土中層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から10世紀前葉と考えられる。



第17図 第4号竈穴建物跡実測図 (1)

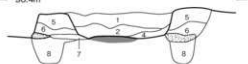




J 96.4m J'



K 96.4m K'

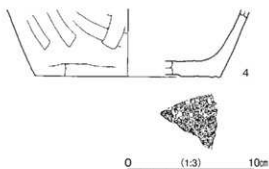
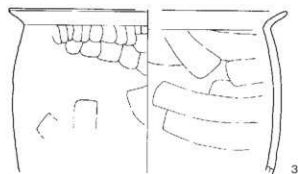
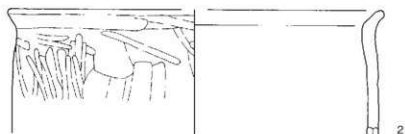
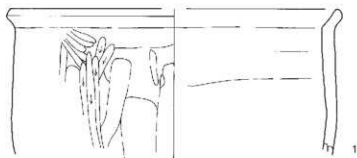


遺土層解説

- 1 暗 褐色 シルト粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 焼土ブロック・炭化物・シルト粒子少量
- 3 暗 褐色 焼土粒子・炭化物中量, シルト粒子少量
- 4 黒 褐色 焼土ブロック中量, 炭化粒子・シルト粒子少量

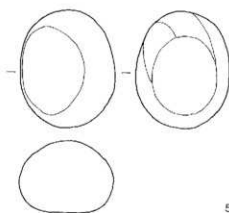
- 5 暗 褐色 シルト粒子中量, 炭化物少量, 焼土ブロック微量
- 6 暗 褐色 シルト粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 7 黒 褐色 焼土ブロック・炭化物・シルト粒子少量
- 8 暗 褐色 焼土粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子・シルト粒子少量, 炭化物微量

0 (1:30) 1m



0 (1:3) 10cm

第 18 図 第 4 号竪穴建物跡実測図 (2)・出土遺物実測図 (1)



第19図 第4号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第4号竪穴建物跡出土遺物観察表(第18・19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	鉢	[260]	(11.6)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ後ヘラ削り 内面ロクロナデ	覆土中層 甕壇土下層	10% PL14
2	土師器	鉢	[296]	(9.9)	—	長石・石英・細礫	明赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ後ヘラ削り 内面ヘラナデ	甕壇土中層	20% PL12
3	土師器	壺	[220]	(12.9)	—	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	5%
4	土師器	壺	—	(5.4)	[14.8]	長石・石英・細礫	にぶい黄緑	普通	体部外面ロクロナデ後ヘラ削り	甕壇方覆土中層	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
5	磨石	9.4	7.6	5.7	5500	アイサイト	上・下面に磨り痕		覆土中	PL15	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
6	不明器物	(3.1)	(2.0)	(0.75)	(0.18)	鉄	錆による腐食が激しい		覆土中層		

#### 第5号竪穴建物跡(第20～23図 PL6・7)

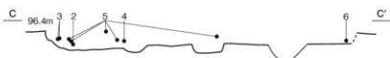
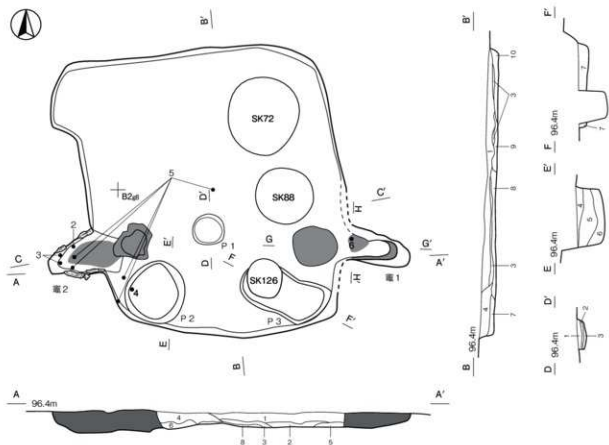
**位置** 調査区中央部のB27区、標高96.2mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

**重複関係** 第72・88・126号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.58m、短軸4.02mの隅丸長方形で、主軸方向はN-101°-Wである。壁は高さ16～26cmで、外傾している。

**床** 平坦である。硬化面は確認できなかった。

**竈** 2か所。竈1は東壁の南寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで186cm、燃焼部幅は40～45cmである。火床面は床面と同じ高さで、焼土は厚さ10cmである。煙道部は壁外へ100cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。袖部は確認できず、第1・2層は甕解体後に建物の壁として構築された可能性があり、竈1解体後に竈2が構築されたと思われる。竈2は西壁の南寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで170cm、燃焼部幅は40～55cmである。火床面は床面とほぼ同じ高さで、焼土は厚さ9cmである。構築材と考えられる石材が内壁に沿って据えられている。煙道部は壁外へ85cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。袖部は確認できず、P2から竈2で使用されたと思われる石材が出土しており、建物廃絶時に解体されている。



#### 土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・細礫少量、シルト粒子・白色粒子・中礫微量
- 2 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子・細礫微量
- 3 灰黄褐色 シルト粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、白色粒子・細礫微量
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、細礫微量
- 6 黒褐色 焼土粒子・シルト粒子・大礫少量、炭化粒子微量
- 7 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粒子・細礫微量
- 8 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粒子・細礫微量
- 9 暗褐色 シルト粒子・細礫少量、中礫微量
- 10 暗褐色 シルト粒子・細礫少量、炭化物微量

#### ビッド土層解説

- 1 暗褐色 細礫中量、シルト粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 炭化粒子・白色粒子微量
- 3 暗褐色 炭化粒子中量、白色粒子微量
- 4 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量、シルト粒子少量
- 5 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量、シルト粒子少量
- 6 黒褐色 焼土粒子・炭化物中量、シルト粒子少量
- 7 暗褐色 焼土ブロック・炭化物少量、シルト粒子微量

0 (1:60) 2m

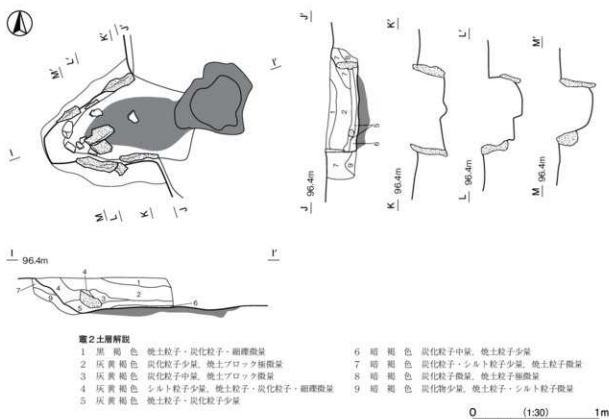


#### 竈1土層解説

- 1 黒褐色 炭化物少量、焼土ブロック・白色粒子・細礫微量
- 2 暗褐色 焼土ブロック・炭化物少量、白色粒子・細礫微量
- 3 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・白色粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、白色粒子微量
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粒子極微量

0 (1:30) 1m

第20図 第5号竈穴建物跡実測図(1)



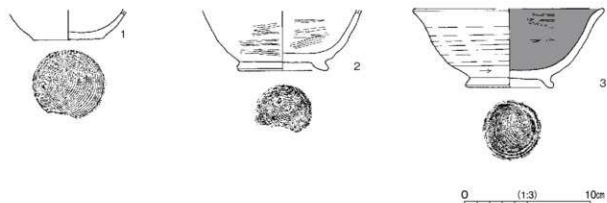
第21図 第5号竪穴建物跡実測図(2)

**ピット** 3か所。P1は径50cmの円形で、深さ15cmである。P2は長径98cm、短径95cmの円形で、深さ45cmである。P3は長径138cm、短径65cmの楕円形で、深さは15cmである。P2・P3は貯蔵穴の可能性がある。竈構築材が出土していることから、竈解体時にそれぞれ埋め戻されたと考えられる。P1の性格は不明である。

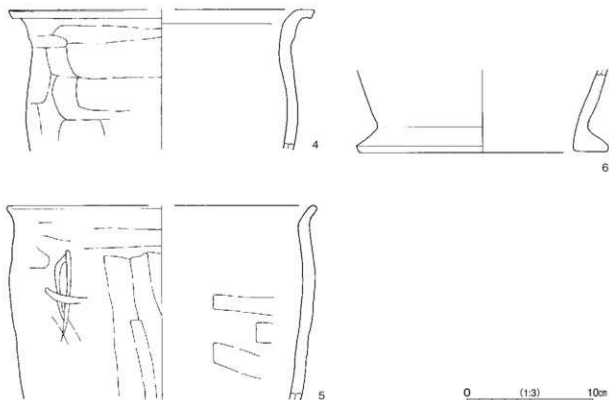
**覆土** 10層に分層できる。流れ込みによる自然堆積である。

**遺物出土状況** 土師器片327点(坏類70、高台付坏4、高台付碗1、小皿2、甕類249、瓶1)、鉄洋1点(173.75g)、礫26点(総重量46.171g)、被熱礫35点(竈構築材6、総重量39.855g)が出土している。2・3・5は竈2覆土中層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から10世紀中葉と考えられる。



第22図 第5号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第23図 第5号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第5号竪穴建物跡出土遺物観察表(第22・23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	—	(24)	5.5	長石・石英・赤色粒子・細礫	にぶい橙	良好	体部外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土中	20%
2	土師器	高台付耳	—	(48)	7.0	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ロクロナデ後へラ磨き 内面へラ磨き 底部回転糸切り後高台が付	層2 覆土中層	30% PL11
3	土師器	高台付瓶	[148]	6.3	6.8	長石・石英・雲母・細礫	にぶい橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 外面下縁へラ削り 内面へラ磨き 底残り、底部処理 摩滅が著しい	層2 覆土中層	70% PL11
4	土師器	壺	[244]	(11.1)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子・細礫	にぶい赤橙	普通	口縁部外・内面ロクロナデ 体部外・内面へラナデ	覆土中層	20% PL12
5	土師器	壺	[242]	(15.4)	—	長石・石英・赤色粒子・細礫	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外・内面へラナデ	層2 覆土中層	30% PL13
6	土師器	瓶	—	(6.5)	[196]	長石・石英・細礫	にぶい橙	普通	体部外・内面へラナデ 底部横ナデ	層1 覆土下層	5% PL14

#### 第6号竪穴建物跡(第24・25図 PL7・8)

**位置** 調査区中央部のB238区、標高96.6mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

**規模と形状** 長軸5.18m、短軸4.18mの隅丸長方形で、主軸方向はN-87°-Eである。壁は高さ23~30cmで、外傾している。

**床** 平坦である。硬化面は確認できなかった。

**竈** 東壁の中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで155cm、燃焼部幅は70cmである。地山を掘り残して袖の基部としている可能性があるが袖部は確認できなかった。火床面は床面と同じ高さで、焼土は厚さ7cmである。煙道部は壁外へ100cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第3・4層の天井部及び内壁が崩れた後、第1・2層が流れ込んでいる。

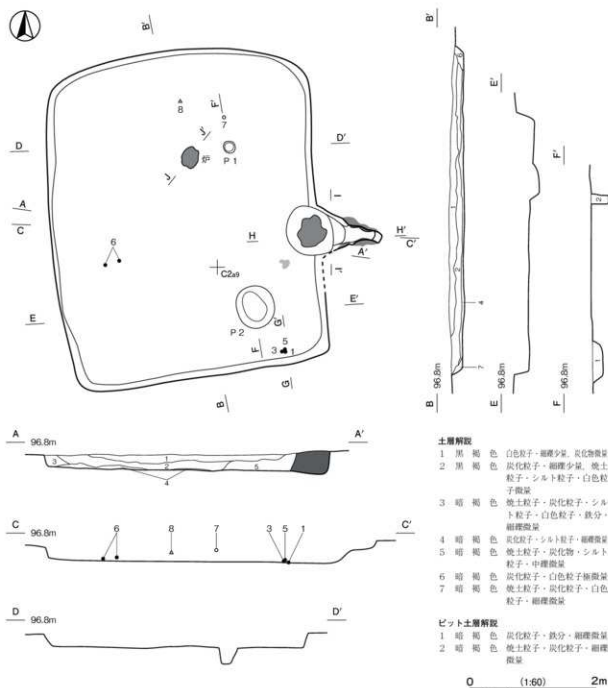
**炉** 中央部北東側に位置している。長さ35cm、短径20cmの楕円形で、床面を5cm掘りくぼめ使用した地床炉である。

ピット 2か所。P 1は径18cmの円形で、深さ28cmである。P 2は長径70cm、短径60cmの楕円形で、深さ14cmである。ともに性格は不明である。

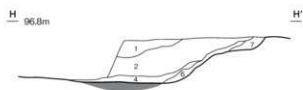
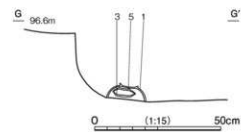
覆土 7層に分層できる。流れ込みによる自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片 213点（坏類 86、高台付坏6、高台付碗2、小皿6、甕類113）、土製品1点（管状土錘）、金属製品1点（刀子）、礫 23点（総重量18,290g）、被熱礫5点（総重量5,559g）が出土している。1は南壁東隅の床面から逆位の状態で出土している。その内側から、3と5が口縁部を合わせた状態で出土した。2つの間からは何も確認できなかった。

所見 時期は、出土土器から10世紀中葉と考えられる。



第24図 第6号竪穴建物跡実測図(1)

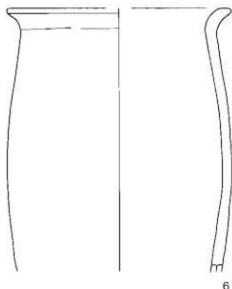
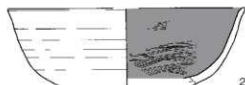
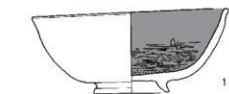


**壙土層解説**

- 1 暗褐色 焼土粒子・白色粒子少量、炭化粒子・細礫微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粒子・鉄分・細礫微量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粒子微量
- 4 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、細礫微量
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、白色粒子微量
- 6 暗褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 7 暗褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量

**伊土層解説**

- 1 暗褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量



第25図 第6号竪穴建物跡実測図(2)・出土遺物実測図

第6号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高台付瓶	15.6	6.7	5.9	長石・石英・細礫 赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面へう磨き、黒色処理 摩滅が著しい	床面	95% PL.11
2	土師器	高台付瓶	[18.6]	6.2	—	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面へう磨き、黒色処理 摩滅が著しい	覆土中	20%
3	土師器	小皿	9.1	2.0	4.8	長石・石英・細礫 黒色粒子	にぶい橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転へう切り 5と合わせ(下)	床面	100% PL.11
4	土師器	小皿	[9.7]	2.5	[4.7]	長石・石英	橙	普通	体部内面へう磨き、黒色処理 摩滅が著しい	覆土中	30%
5	土師器	小皿	9.7	2.9	4.6	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部回転系切り 3と合わせ(上)	3上部	100% PL.11 打明に使用
6	土師器	壺	[17.7]	[20.9]	—	長石・石英・細礫	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	床面	20% PL.14

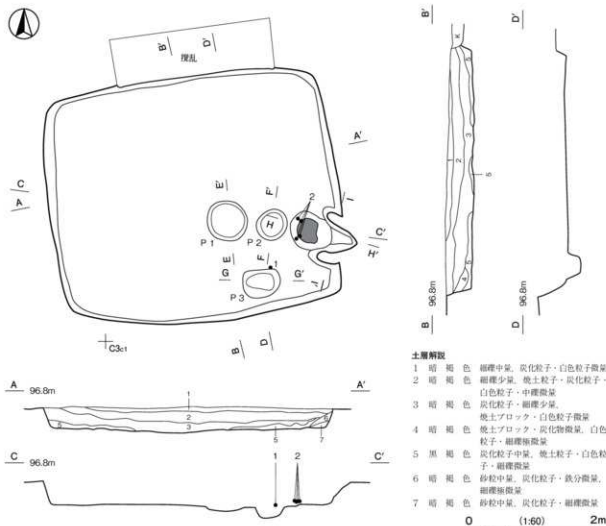
番号	器種	長さ	径	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
7	管状土師	3.1	1.8	0.4	(8.63)	長石・石英・黒色粒子	にぶい橙	一部欠損	覆土中層	90% PL.15

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
8	刀子	(7.2)	1.3	(0.4)	(9.63)	鉄	刃部断面三角形一部欠損 柄部断面台形 両側 両端欠損	覆土中層	

第7号竪穴建物跡 (第26・27図)

位置 調査区南部のC2b0区、標高96.5mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。



第26図 第7号竪穴建物跡実測図 (1)



**規模と形状** 長軸 4.56 m、短軸 3.92 m の隅丸長方形で、主軸方向は N-79°-E である。壁は高さ 38cm で、外傾している。

**床** 平坦である。硬化面は確認できなかった。P1 周辺は水が染み出し非常に緩い。

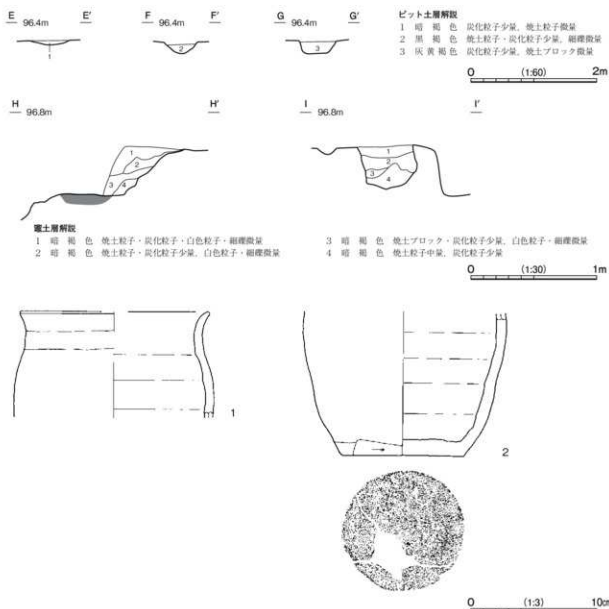
**竈** 東壁の南隅に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで 110cm、燃焼部幅は 55cm である。地山を掘り残して軸の基部としている。火床面は床面と同じ高さで、焼土は厚さ 8cm である。煙道部は壁外へ 30cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

**ピット** 3か所。P1 は径 60cm の円形で、深さ 6cm である。P2 は径 50cm で、深さ 20cm である。P3 は長径 60cm、短径 43cm の楕円形で、深さは 20cm である。いずれも性格は不明である。

**覆土** 7層に分層できる。流れ込みによる自然堆積である。

**遺物出土状況** 土師器片 144 点(坏類 52, 高台付坏 7, 甕類 85)、金属製品 3 点(不明鉄製品)、鉄滓 3 点(70.59 g)、礫 5 点(総重量 5.604g)、被熱礫 1 点(86g)が出土している。1 は床面から、2 は竈の覆土下層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から 10 世紀前葉と考えられる。



第 27 図 第 7 号竈穴建物跡実測図 (2)・出土遺物実測図

第7号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	甕	[148]	(8.4)	—	長石・石英・雲母	におい橙	普通	体部外面ナデ 内面ロクロナデ	床面	25% 2と同一器体
2	土師器	甕	—	(11.4)	9.6	長石・石英・雲母	におい黄橙	普通	体部外面下端へウ倒り 内面ロクロナデ	職覆土下層	20% 1と同一器体

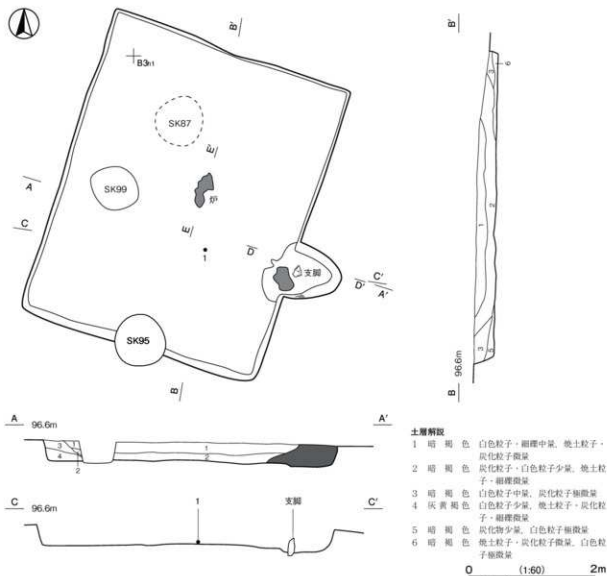
第8号竪穴建物跡 (第28～30図)

位置 調査区中央部のB 2g0区、標高96.3mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

重複関係 第87・95・99号土坑に掘り込まれている。第87号土坑は浅く、第8号竪穴建物の床面を掘り込んではいない。

規模と形状 長軸5.03m、短軸3.96mの長方形で、主軸方向はN-109°-Eである。壁は高さ16～32cmで、外傾している。

床 平坦である。硬化面は確認できなかった。



第28図 第8号竪穴建物跡実測図(1)



第29図 第8号竪穴建物跡実測図(2)

**竈** 東壁のやや南寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで110cm、燃焼部幅は70cmである。袖部は解体されており確認できなかったが、地山を掘り残して基部としていたと推測される。火床面は床面から5cmくぼみ、焼土は厚さ4cmである。煙道部は壁外へ80cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

**炉** 中央部に位置している。長径75cm、短径40cmの不定形で、床面を4cm掘りくぼめ使用した地床炉である。覆土 6層に分層できる。流れ込みによる自然堆積である。

**遺物出土状況** 土師器片42点(坏類13, 高台付坏2, 高台部1, 甕類26), 礫9点(総重量21,289g), 被熱礫3点(支脚1, 総重量5,889g)が出土している。1は床面から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から10世紀前葉と考えられる。



第30図 第8号竪穴建物跡出土遺物実測図

第8号竪穴建物跡出土遺物観察表(第30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
1	土師器	高台付坏	[145]	(52)	—	長石・石英・赤色粒子・雜質	橙	普通	体部外面ロクロナデ 高台部欠損	内面ヘラ磨き、黒色処理	床面	50%

第9号竪穴建物跡(第31・32図 PL 8)

**位置** 調査区中央部のB 210区、標高96.3mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

**規模と形状** 長軸4.60m、短軸4.18mの長方形で、主軸方向はN-98°-Eである。壁は高さ15cmで、外傾している。

**床** 平坦である。硬化面は確認できなかった。

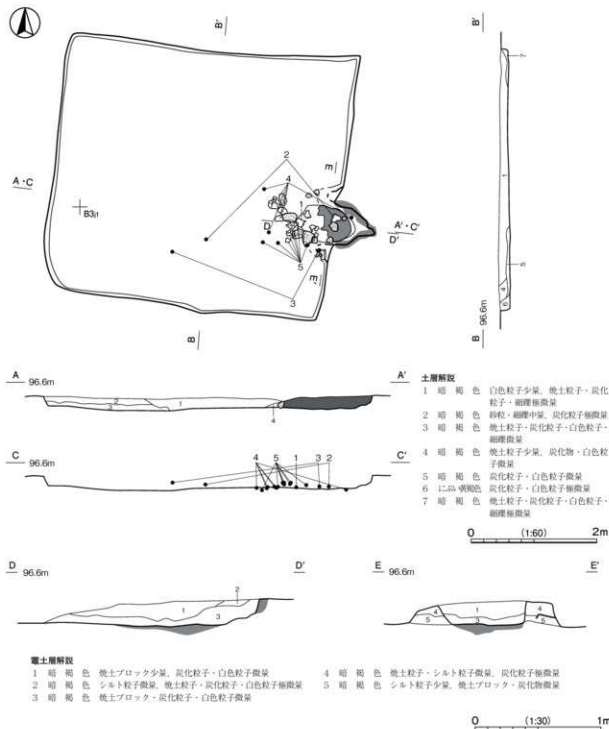
**竈** 東壁の南寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで136cm、燃焼部幅は55cmである。袖部

は構築されていることが確認できた。火床面は床面と同じ高さで、焼土は厚さ8cmである。火床面から竈構築材が出土している。煙道部は壁外へ70cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

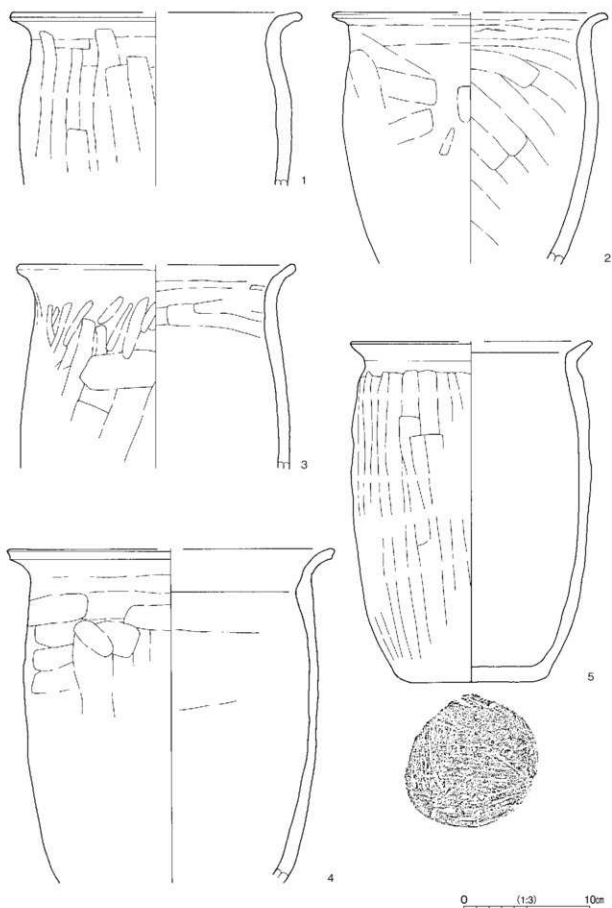
**覆土** 7層に分層できる。流れ込みによる自然堆積である。

**遺物出土状況** 土師器片 31点（坏類3、高台付坏2、小皿1、甕類25）、礫 19点（総重量31.531g）が出土している。1は竈覆土下層から、3は竈袖部と覆土中層から、4・5は竈前で礫と一緒にそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から10世紀中葉と考えられる。



第31図 第9号竈穴建物跡実測図



第32图 第9号竖穴建物跡出土遺物実測図

第9号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	甕	[228]	(137)	—	長石・石英・雲母・ 繊維	灰褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外面ヘラナデ	甕履土下層	10% PL14
2	土師器	甕	[214]	(200)	—	長石・石英・繊維	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外・内面ヘラナデ	甕土下層 甕履土下層	10% PL14
3	土師器	甕	[217]	(162)	—	長石・石英・赤鉄粒子・ 繊維	橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外・内面ヘラナデ	甕胎部 履土中層	20%
4	土師器	甕	[254]	(265)	—	長石・石英・雲母・ 繊維	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ナデ 体部外・内面ヘラナデ	甕履土上層	20% PL13
5	土師器	甕	[190]	27.1	100	長石・石英・赤鉄粒子	浅黄褐色	普通	口縁部残ナデ 体部外面ヘラナデ 内面口クロ ナデ 胎部ヘラナデ	床面	30% PL13

第10号竪穴建物跡 (第33・34図)

位置 調査区南部のC3d4区、標高96.6mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

規模と形状 北西側が自然流路により削られている。残存部から、長軸3.72m、短軸3.25mの長方形で、主軸方向はN-110°-Wと推定される。

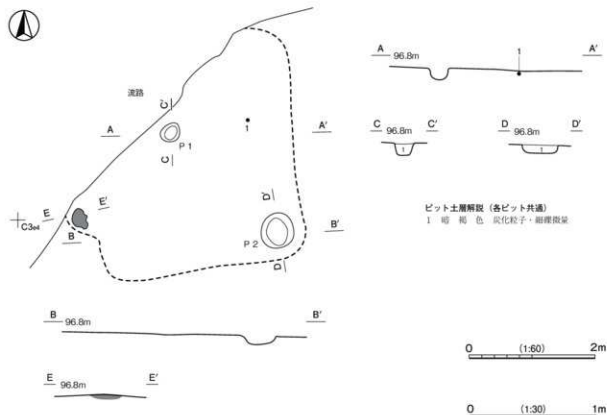
床 覆土が残っておらず、床面のみ確認した。平坦であるが、硬化面は確認できなかった。

竈 西壁の南寄りに付設されている。燃焼部のみ確認できた。幅は25～35cmである。

ピット 2か所。P1は長径35cm、短径30cmの楕円形で、深さ20cmである。P2は長径55cm、短径50cmの楕円形で、深さ15cmである。壁は外傾して立ち上がっている。ともに性格は不明である。

遺物出土状況 土師器片64点(坏類50、高台付坏2、高台部2、甕類7、小形甕3)、須恵器片1点(甕類)、土師質土器片126点(小皿)、礫2点(総重量3.822g)が出土している。1は床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第33図 第10号竪穴建物跡実測図



第34図 第10号竪穴建物跡出土遺物実測図

第10号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第34図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	—	(3.3)	5.3	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転糸切り 単威が著しい	床面	20%
2	土師器	坏	—	(2.8)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ロクロナゲ 外・内面漆付着	覆土中	5% PL14

表2 平安時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁高 (cm)	床面	欄溝	内部施設			覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)	(cm)				柱穴	竪穴	竪穴				
1	A 36	N-90°-E	方形	4.56×4.36	25	平坦	凹状	—	2	竪穴	—	自然	土師器、須恵器、 灰陶器、磁器	10世紀前半	本跡→SK119
2	B 34d	N-98°-E	方形	5.41×5.20	40~55	平坦	全周	2	2	竪穴	1	自然	土師器、須恵器、磁器、 石器、金属製品、漆器	10世紀前半	SK128-130→4棟 →SK131、132、133
3	B 34b	N-90°-W	長方形	4.46×3.96	15~27	平坦	—	—	7	竪穴	—	自然	土師器、須恵器、土師品、 金属製品、漆器	10世紀前半	本跡→SK78・96 東堀→西堀
4	B 246	N-92°-E	長方形	4.36×3.40	8~14	平坦	—	4	6	竪穴	—	自然	土師器、須恵器、石器、 金属製品、漆器	10世紀前半	本跡→SK73・98
5	B 247	N-101°-W	長方形	4.58×4.02	16~26	平坦	—	—	3	柱穴	—	自然	土師器、鉄洋、漆	10世紀中葉	本跡→SK72・88→ 東堀→西堀
6	B 248	N-87°-E	長方形	5.18×4.18	23~30	平坦	—	—	2	竪穴	—	自然	土師器、土師品、 金属製品	10世紀中葉	
7	C 246	N-79°-E	長方形	4.56×3.92	38	平坦	—	—	3	東堀	—	自然	土師器、金属製品、 鉄洋	10世紀前半	
8	B 24g	N-109°-E	長方形	5.03×3.96	16~32	平坦	—	—	—	竪穴	—	自然	土師器	10世紀前半	本跡→SK87・ 95・99
9	B 24f	N-98°-E	長方形	4.60×4.18	15	平坦	—	—	—	東堀	—	自然	土師器、漆	10世紀中葉	
10	C 34d	[N-10°-W]	[長方形]	[3.72]×[3.25]	—	平坦	—	—	2	西堀	—	—	土師器、須恵器、 土師器土質	10世紀後半	

## (2) 掘立柱建物跡

### 第1号掘立柱建物跡 (第35図)

**位置** 調査区中央部のB 2 a7区、標高96.1 mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

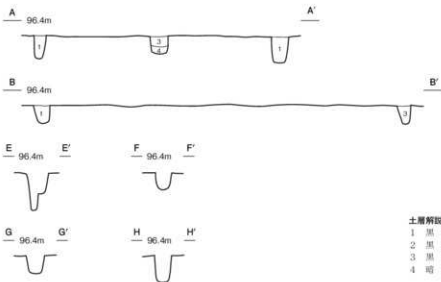
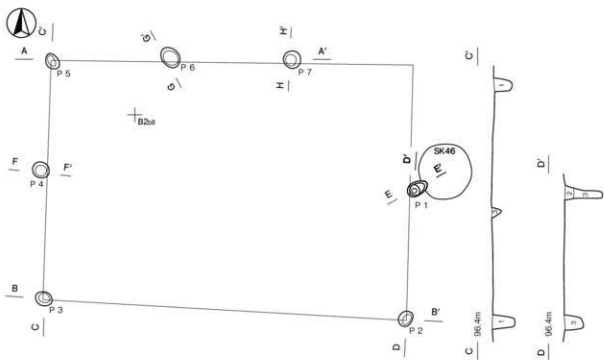
**重複関係** 第46号土坑をP 1が掘り込んでいる。

**規模と形状** 桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡の可能性があり、桁行方向がN-90°-Eの東西棟である。北東角と南側の2か所は確認できなかった。規模は確認できた部分で、桁行5.95 m、梁行3.80 mで、面積は226.1㎡である。柱間寸法は桁行が2.0 m (7尺)、梁行が北平から1.8 m (6尺)、2.1 m (7尺)である。P 2の配置で、南平側が若干広がるが、柱筋はほぼ揃っている。

**柱穴** 7か所。平面形は円形または楕円形で、長径25~36 cm、短径20~28 cmである。深さは28~61 cmで、掘方の壁はほぼ直立している。第1~4層は、柱抜き取り後の覆土である。

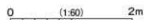
**遺物出土状況** 土師器片3点 (坏類2、甕類1) がP 6・P 7の覆土中から出土している。

**所見** 出土土器が細片で、時期決定が困難である。他の建物の軸方向を考慮すると、10世紀中葉と考えられる。



土層解説 (各柱穴共通)

- 1 黒 褐色 炭化粒子微量, 白色粒子極微量
- 2 黒 褐色 白色粒子中量, 炭化物少量
- 3 黒 褐色 炭化粒子・白色粒子少量
- 4 暗 褐色 炭化粒子・白色粒子極微量



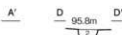
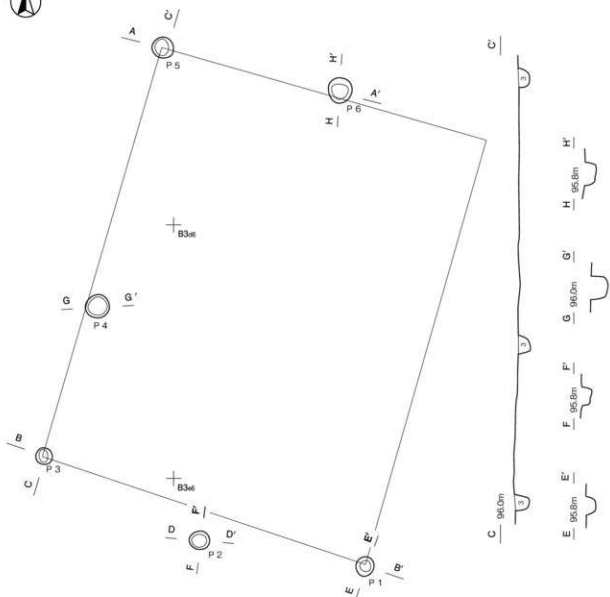
第 35 図 第 1 号掘立柱建物跡実測図

第 2 号掘立柱建物跡 (第 36 図)

位置 調査区中央部の B 3 c5 区、標高 95.7 m ほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

規模と形状 桁行 3 間、梁行 2 間の掘立柱建物跡の可能性があり、桁行方向が N - 15° - E の南北棟である。北東角と東側の 2 か所、西側 1 か所は確認できなかった。規模は確認できた部分で、桁行 7.02 m、梁行 5.62 m で、面積は 39.45 m<sup>2</sup> である。柱間寸法は桁行が北妻から 4.2 m (14 尺)、2.5 m (8 尺)、梁行が西平から 2.8 m (9 尺)、2.6 m (9 尺) である。P 2 が少し外側に位置しているが、柱筋はほぼ揃っている。





土层解説 (各柱穴共通)

- 1 暗褐色 炭化粒子・白色粒子微少量
- 2 暗褐色 炭化物微量
- 3 暗褐色 炭化粒子微量



第36図 第2号掘立柱建物跡実測図

**柱穴** 6か所。平面形は円形または楕円形で、長径25～34cm、短径20～28cmである。深さは26～43cmで、掘方の壁は外傾している。第1～3層は、柱抜き取り後の覆土である。

**所見** 出土土器が無く、他の建物の軸方向を考慮すると、10世紀前葉と考えられる。性格は不明である。

表3 平安時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	掘行方向	柱間数		規模 幅×壁(m) (㎡)	柱間寸法			柱穴		主な出土遺物	時期	備考	
			幅×壁間	幅×壁		掘間(m)	壁間(m)	構造	柱数	平面形				深さ(cm)
1	B 2a7	N-90°-E	3×2	5.95×3.80	22.61	2.0	1.8-2.1	欄柱	7	円形・楕円形	28-61	土師器	10世紀中葉	SK46→本跡
2	B 3c5	N-15°-E	3×2	7.02×5.62	39.45	2.5-4.2	2.6-2.8	欄柱	6	円形・楕円形	26-43		10世紀前葉	

### (3) 土坑

#### 第11号土坑 (第37図 PL 9)

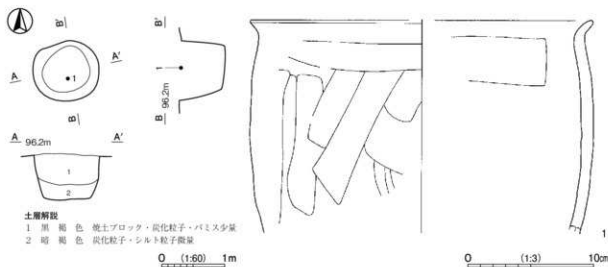
**位置** 調査区中央部のB 2c0区、標高96.0mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径1.04m、短径0.96mの円形で、深さは70cmである。壁は直立し、底面は平坦である。

**覆土** 2層に分層できる。焼土ブロックや炭化粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片7点(小皿1、甕類6)が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から、10世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



#### 土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子・パミス少量
- 2 暗褐色 炭化粒子・シルト粒子微量

第37図 第11号土坑・出土遺物実測図

第11号土坑出土遺物観察表 (第37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	甕	[272]	[169]	—	長石・石英・ 赤鉄粒子・磁礫	橙	普通	口縁部横ナゲ 体部外面ヘラナゲ	覆土上層	20%

#### 第19号土坑 (第38図)

**位置** 調査区北部のA 2f8区、標高95.9mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

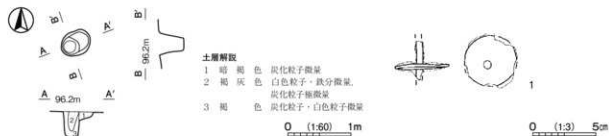
**規模と形状** 長径0.51m、短径0.38mの楕円形で、長径方向はN-65°-Eである。深さは40cmで、壁は直立し、

底面は平坦である。

**覆土** 3層に分層できる。炭化粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 金属製品1点(紡錘車)が出土している。

**所見** 時期は、出土金属製品から、第2号竪穴建物跡と同時期の10世紀前葉と考えられる。性格は不明である。

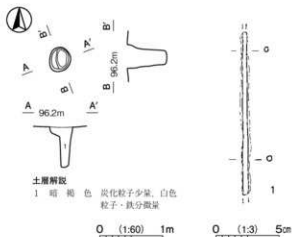


第38図 第19号土坑・出土遺物実測図

第19号土坑出土遺物観察表(第38図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	紡錘車	(3.2)	0.6	0.4	(13.75)	鉄	紡錘部外径4.3cm、孔径0.6cm 紡錘部一部欠損 紡錘部両端欠損	覆土中	PL16

第20号土坑(第39図)



第39図 第20号土坑・出土遺物実測図

第20号土坑出土遺物観察表(第39図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	紡錘	(13.0)	0.4	—	(9.80)	鉄	両端欠損	覆土中	PL16

第25号土坑(第40図)

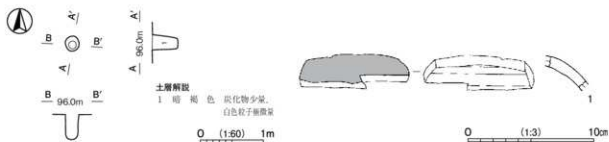
**位置** 調査区北部のA3B区、標高95.8mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径0.23m、短径0.21mの円形である。深さは40cmで、壁は直立し、底面は皿状である。

**覆土** 単一層で、炭化物が含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 灰軸陶器片1点（短頸壺）が出土している。

**所見** 時期は、出土陶器片から、10世紀中葉と考えられる。性格は不明である。



第40図 第25号土坑・出土遺物実測図

第25号土坑出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	灰軸陶器	短頸壺	—	(27)	—	長石・石英・黒色粒子	灰白	良好	体部外・内面ロクナデ 外面施釉	覆土中	5% PL15 量投産

第34号土坑（第41図 PL9）

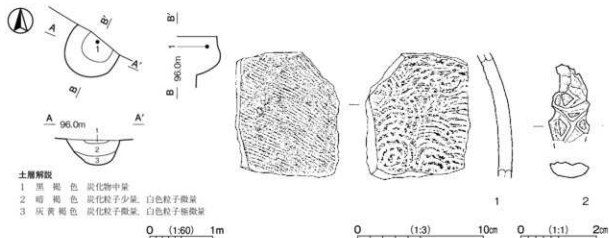
**位置** 調査区北部のA3e3区、標高95.8mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

**規模と形状** 北東部が調査区域外に延びているため、径0.89mの円形と推定した。深さは38cmで、壁は緩やかに外傾し、底面は皿状である。

**覆土** 3層に分層できる。炭化物が含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 須恵器片4点（甕類）、銅滓1点（1.49g）が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から、10世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



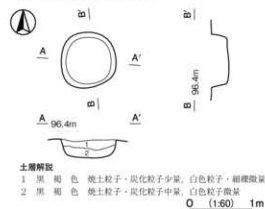
第41図 第34号土坑・出土遺物実測図

第34号土坑出土遺物観察表（第41図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	甕	—	(9.9)	—	長石・石英・細礫	灰黄	良好	体部外面斜位の平行明き 内面同心円文の丹具痕	覆土中層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2	銅萍	(21)	1.1	0.4	(1.89)	銅	流動萍	覆土中	

#### 第49号土坑 (第42図)



第42図 第49号土坑実測図

**位置** 調査区の中央部のB 2b8区、標高96.1mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径0.93m、短径0.91mの円形である。深さは27cmで、壁はほぼ直立し、底面は平坦である。

**覆土** 2層に分層できる。焼土粒子や炭化粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片13点(坏類4、甕類9)が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から、11世紀中葉と考えられる。性格は不明である。

#### 第52号土坑 (第43図)

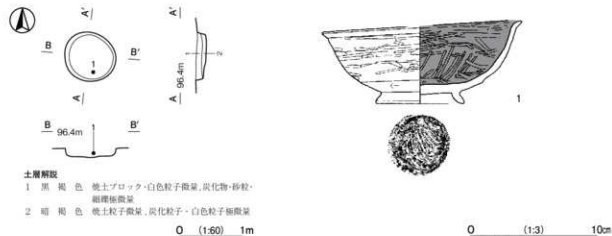
**位置** 調査区の中央部のB 2d8区、標高96.1mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径0.82m、短径0.79mの円形である。深さは13cmで、壁は直立し、底面は平坦である。

**覆土** 2層に分層できる。焼土ブロックや炭化物が含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片2点(高台付碗、甕類)が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から、10世紀中葉と考えられる。性格は不明である。



第43図 第52号土坑・出土遺物実測図

#### 第52号土坑出土遺物観察表 (第43図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高台付碗	[15.9]	6.6	7.0	長石・石英・繊維	橙	普通	体部外面ロクロナデ 外・内面ヘラ磨き 黒色処理 底部回転糸取り後蓋台付	覆土下層	60% PL11

### 第75号土坑 (第44図 PL 9)

**位置** 調査区中央部のB3c2区、標高95.9mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

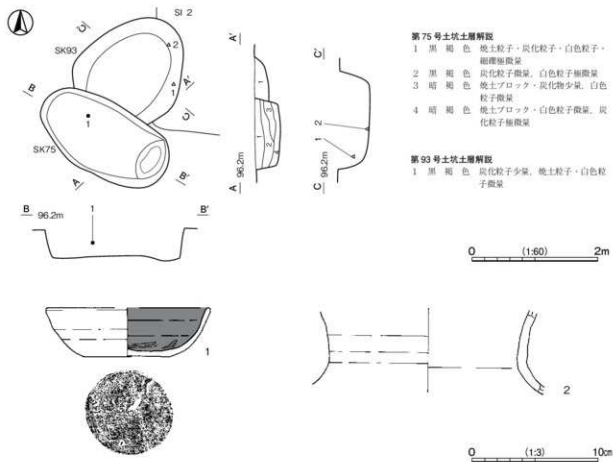
**重複関係** 第93号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径2.20m、短径1.15mの楕円形で、長径方向はN-60°-Wである。深さは45cmで、壁はほぼ直立し、底面は平坦で、南東部がややくぼむ。

**覆土** 4層に分層できる。焼土ブロックや炭化物が含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片16点(坏類5、甕類11)、須恵器片2点(甕類)が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から、10世紀中葉と考えられる。性格は不明である。



#### 第75号土坑土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・白色粒子・細塵微塵量
- 2 黒褐色 炭化粒子微量、白色粒子極微量
- 3 暗褐色 焼土ブロック・炭化物少量、白色粒子微量
- 4 暗褐色 焼土ブロック・白色粒子微量、炭化粒子極微量

#### 第93号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量、焼土粒子・白色粒子微量

第44図 第75・93号土坑・出土遺物実測図

### 第75号土坑出土遺物観察表 (第44図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[128]	39	6.5	長石・石英・赤鉄質・炭化粒子・白色粒子	にぶい・黒	普通	体部外・内面ロクロナデ 肌理 底部斜縁糸切 厚減が著しい	覆土中層	60% PL10
2	須恵器	甕	—	(6.7)	—	長石・石英	黄灰	普通	体部外面ロクロナデ	覆土中	5%

### 第90号土坑 (第45図)

**位置** 調査区南部のC3e4区、標高96.6mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

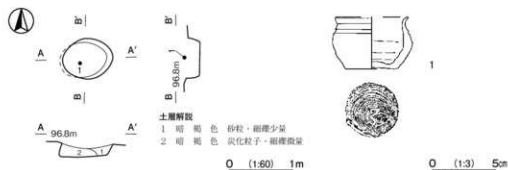
**規模と形状** 長径0.80m、短径0.65mの楕円形で、長径方向はN-87°-Eである。深さは19cmで、壁は外傾し、

底面は平坦である。

**覆土** 2層に分層できる。流れ込みによる自然堆積である。

**遺物出土状況** 土師器片20点(坏類11, 高台付坏1, 甕類7, 小形甕1)が出土している。

**所見** 時期は, 出土土器から, 10世紀後葉と考えられる。性格は不明である。



第45図 第90号土坑・出土遺物実測図

第90号土坑出土遺物観察表(第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	小形甕	5.8	4.1	4.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外・内面ロクナデ 底面回転未切り	覆土上層	90% PL14

第93号土坑(第44・46図 PL9)

**位置** 調査区中央部のB3c3区, 標高95.9mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

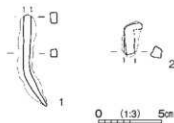
**重複関係** 第2号竪穴建物跡を掘り込み, 第75号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 第75号土坑に掘り込まれているが, 長径2.0m, 短径1.5mの楕円形と推定でき, 長径方向はN-41°-Eである。深さは47cmで, 壁は外傾し, 底面は平坦である。

**覆土** 単一層で, 焼土粒子や炭化粒子が含まれていることから, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片94点(坏類26, 高台部1, 甕類67), 須恵器片7点(甕類), 金属製品2点(釘)が出土している。

**所見** 時期は, 10世紀前葉と考えられる第2号竪穴建物跡を掘り込んでいることや出土土器から, 10世紀中葉と考えられる。性格は不明である。



第46図 第93号土坑出土遺物実測図

第93号土坑出土遺物観察表(第46図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	釘	(7.4)	0.5	0.6-0.9	(18.18)	鉄	頭部欠損	覆土中層	
2	釘	(2.8)	1.5	0.9	(8.20)	鉄	先端部欠損	底面	

### 第 97 号土坑 (第 47 図)

**位置** 調査区中央部の B 3 c3 区、標高 95.4 m ほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

**重複関係** 第 2 号堅穴建物跡を掘り込んでいる。第 2 号堅穴建物跡の土層では確認できなかったことや建物跡の床面を確認できなかったことから、第 2 号堅穴建物の廃絶後、埋没する前に掘り込まれた土坑である。

**規模と形状** 長径 2.07 m、短径 1.85 m の不定形で、長径方向は N - 70° - E である。深さは 57 cm で、壁は緩やかに外傾し、底面は凹凸である。

**覆土** 7 層に分層できる。焼土ブロックや炭化物が含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片 24 点 (坏類 1、甕類 23)、須恵器 1 点 (甕)、金属製品 2 点 (釘、不明鉄製品) が出土している。

**所見** 時期は、重複関係や出土土器から、10 世紀中葉と考えられる。性格は不明である。



#### 土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量、焼土粒子・白色粒子微量
- 2 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子・白色粒子極微量
- 3 に近い黄褐色 焼土ブロック微量、白色粒子極微量
- 4 暗褐色 シルト粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量、白色粒子極微量
- 5 暗褐色 焼土ブロック・炭化物微量、白色粒子極微量
- 6 に近い黄褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量、白色粒子極微量
- 7 に近い黄褐色 炭化粒子微量、白色粒子極微量

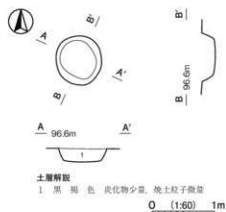
第 47 図 第 97 号土坑・出土遺物実測図

第 97 号土坑出土遺物観察表 (第 47 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
1	須恵器	甕	—	(16.4)	(15.8)	長石・石英	灰白	普通	体部外面斜位の平行突き後へうナデ 内面折衝圧痕	覆土下層	20% PL13
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
2	釘	(6.6)	2.3	(0.5)	(44.8)	鉄	先端部欠損			覆土上層	
3	不明鉄製品	(5.3)	3.2	0.1	(15.13)	鉄	両端欠損			底面	



第114号土坑 (第48図 PL.9)



土層解説

1 黒 褐色 炭化物少量, 焼土粒子微量

第48図 第114号土坑実測図

**位置** 調査区中央部のB 2h9区, 標高96.3mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径0.80m, 短径0.74mの円形で, 深さは21cmである。壁は外傾し, 底面は平坦である。

**覆土** 単一層である。焼土粒子や炭化物が含まれていることから, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片6点(高台付坏1, 碗1, 甕類4)が出土している。

**所見** 時期は, 出土土器から11世紀中葉と考えられる。性格は不明である。

第118号土坑 (第49図)

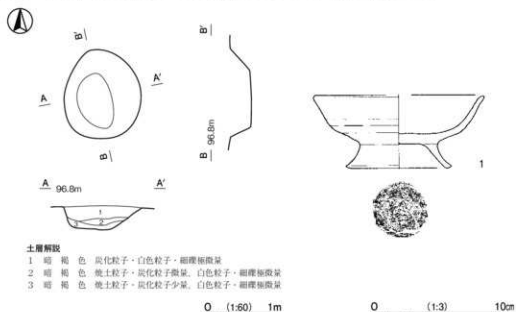
**位置** 調査区南部のC 3c2区, 標高96.5mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径1.39m, 短径1.22mの楕円形で, 長径方向はN-12°-Wである。深さは37cmで, 壁は外傾し, 底面は平坦である。

**覆土** 3層に分類できる。焼土粒子や炭化粒子が含まれていることから, 埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片6点(坏類2, 高台付坏2, 甕類2)が出土している。

**所見** 時期は, 出土土器から, 10世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



土層解説

- 1 暗 褐色 炭化粒子・白色粒子・細粒極微量
- 2 暗 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量, 白色粒子・細粒極微量
- 3 暗 褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, 白色粒子・細粒極微量

第49図 第118号土坑・出土遺物実測図

第118号土坑出土遺物観察表(第49図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高台付坏	[134]	5.8	7.6	長石・石英・赤色粒子・繊維	橙	普通	体部外面クワロナテ 底部回転糸切り後高台取付 高台高さ2cm	覆土中	30% PL11

### 第119号土坑 (第50・51図)

**位置** 調査区北部A 3j6区、標高95.6mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

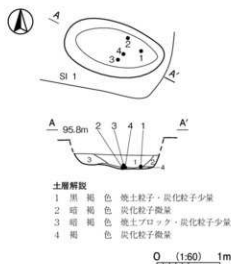
**重複関係** 第1号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径1.58m、短径0.85mの楕円形で、長径方向はN-75°-Wである。深さは50cmで、壁はほぼ直立し、底面はほぼ平坦である。

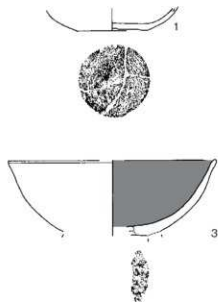
**覆土** 4層に分層できる。焼土ブロックや炭化粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片10点(埴類6、高台付碗3、甕類1)、灰釉陶器片1点(広口壺)、被熱礫2点が出土している。

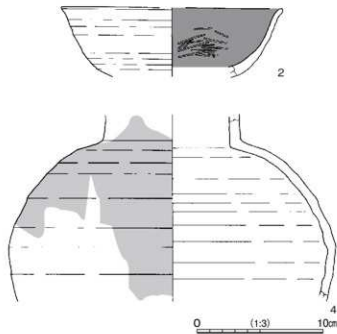
**所見** 時期は、重複関係や出土土器から10世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



第50図 第119号土坑実測図



第51図 第119号土坑出土遺物実測図



### 第119号土坑出土遺物観察表 (第51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	埴	—	(1.9)	5.5	長石・石英・赤色粒子・粗糠	橙	普通	底部回転糸切り 摩滅が著しい	底面	20%
2	土師器	高台付碗	[17.4]	(5.5)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面クロコナデ 内面へう磨き、黒色処理	底面	10%
3	土師器	高台付碗	[16.4]	(5.9)	—	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内面黒色処理 高台部粗糠 摩滅が著しい	底面	30% PL.11
4	灰釉陶器	広口壺	—	(14.7)	—	粗糠	オリーブ黄	良好	体部外・内面クロコナデ 外面施釉	底面	20% PL.15 頸段産

### 第125号土坑 (第52図 PL.9)

**位置** 調査区中央部のB 3b3区、標高95.9mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

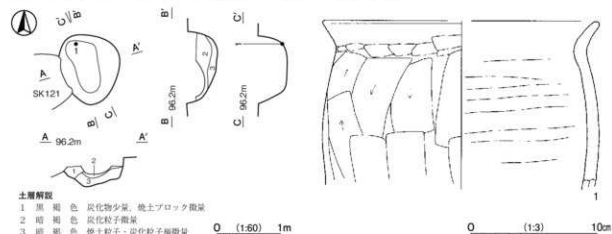
**重複関係** 第120・121号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径1.10m、短径0.93mの楕円形で、長径方向はN-9°-Wである。深さは45cmで、壁は外傾し、底面は平坦である。

**覆土** 3層に分層できる。焼土ブロックや炭化物が含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片1点(甕)が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から、10世紀前葉と考えられる。性格は不明である。

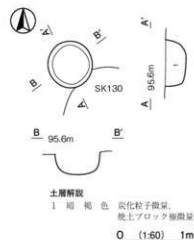


第52図 第125号土坑・出土遺物実測図

第125号土坑出土遺物観察表(第52図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	甕	[21.4]	[13.4]	—	長石・石炭・黒色胎子	褐色	普通	口縁部横ナデ 体部外面横方向のヘラナデ後へラナデ 内面ヘラナデ	底面	10% PL14

第129号土坑(第53図)



第53図 第129号土坑実測図

**位置** 調査区中央部のB3c4区、標高95.4mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

**重複関係** 第130号土坑を掘り込み、第2号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径0.77m、短径0.73mの円形である。深さは38cmで、壁は直立し、底面は平坦である。

**覆土** 単一層で、焼土ブロックや炭化粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片5点(坏類1、甕類4)のほか、縄文土器片1点(深鉢)が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から、10世紀前葉と考えられる。性格は不明である。

第130号土坑(第54・55図)

**位置** 調査区中央部のB3c4区、標高95.5mほどの河岸段丘面の平坦部に位置している。

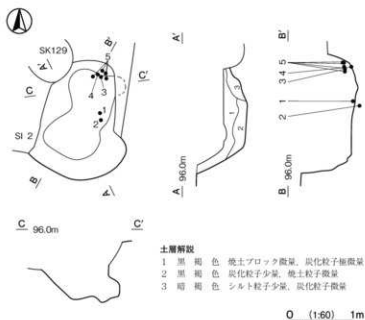
**重複関係** 第2号竪穴建物、第129号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径1.91m、短径1.46mの不整形円形で、長径方向はN-11°-Eである。深さは79cmで、壁は緩やかに外傾し、底面は凹凸である。

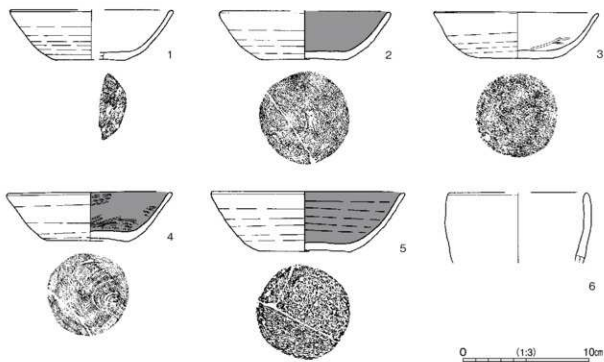
**覆土** 3層に分層できる。焼土ブロックや炭化粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

**遺物出土状況** 土師器片90点(坏類21, 碗1, 鉢1, 甕類67), 須恵器片4点(甕類)が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から、10世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



第54図 第130号土坑実測図



第55図 第130号土坑出土遺物実測図

第130号土坑出土遺物観察表 (第55図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[128]	4.0	[5.4]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ロクロナデ 底部ヘラ削り	底面	40% PL10
2	土師器	坏	[134]	3.8	7.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面黒色処理 糸切り後ヘラ削り 増成が著しい	底部回転 底面	40% PL10
3	土師器	坏	130	3.7	6.2	長石・石英・雲母	灰黄陶	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 糸切り後ヘラ削り 増成が著しい	底部回転 覆土下層	80% PL10
4	土師器	坏	130	3.9	6.5	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転糸切り後ヘラ削り	黒色処理 底面	80% PL10
5	土師器	碗	152	4.8	7.4	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 内面黒色処理 増成が著しい	覆土下層	100% PL11
6	土師器	鉢	[109]	[5.6]	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部内面ヘラナデ	覆土中	5%

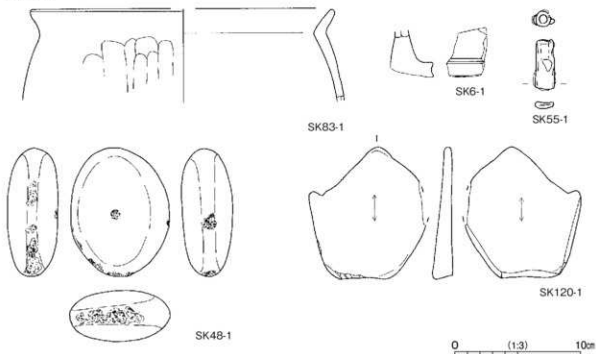
表4 平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
11	B 2 c0	—	円形	1.04 × 0.96	70	直立	平坦	人為	土師器	
19	A 2 f8	N - 65° - E	楕円形	0.51 × 0.38	40	直立	平坦	人為	金属製品	
20	A 2 f8	N - 87° - E	楕円形	0.39 × 0.33	63	直立	平坦	人為	金属製品	
25	A 3 f3	—	円形	0.23 × 0.21	40	直立	凹状	人為	灰釉陶器	
34	A 3 c3	—	[円形]	0.89 × 0.89	38	縦斜	凹状	人為	須恵器, 銅洋	
49	B 2 b8	—	円形	0.93 × 0.91	27	ほぼ直立	平坦	人為	土師器	
52	B 2 d8	—	円形	0.82 × 0.79	13	直立	平坦	人為	土師器	
75	B 3 c2	N - 60° - W	楕円形	2.20 × 1.15	45	ほぼ直立	平坦	人為	土師器, 須恵器	SK90 → 本跡
90	C 3 e4	N - 87° - E	楕円形	0.80 × 0.65	19	外傾・内傾	平坦	自然	土師器	
93	B 3 c3	N - 41° - E	[楕円形]	[2.00] × 1.59	47	外傾	平坦	人為	土師器, 須恵器, 金属製品	SI 2 → 本跡 → SK75
97	B 3 c3	N - 70° - E	不定形	2.07 × 1.85	57	縦斜	凹凸	人為	土師器, 金属製品	SI 2 → 本跡
114	B 2 b9	—	円形	0.80 × 0.74	21	外傾	平坦	人為	土師器	
118	C 3 c2	N - 12° - W	楕円形	1.39 × 1.22	37	外傾	平坦	人為	土師器	
119	A 3 f6	N - 75° - W	楕円形	1.58 × 0.85	50	ほぼ直立	ほぼ平坦	人為	土師器, 灰釉陶器, 鉄熱産	SI 1 → 本跡
125	B 3 b3	N - 9° - W	楕円形	1.10 × 0.93	45	外傾	平坦	人為	土師器	本跡 → SK120・121
129	B 3 c4	—	円形	0.77 × 0.73	38	直立	平坦	人為	土師器	SK130 → 本跡 → SI 2
130	B 3 c4	N - 11° - E	不整形円形	1.91 × 1.46	79	縦斜	凹凸	人為	土師器, 須恵器	本跡 → SI 2, SK129

## 2 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期が明確にできなかった土坑99基を確認している。出土した遺物については実測図(第56図)及び観察表にて掲載する。また、遺構については全体図(第4図)及び一覧表にて掲載する。遺構に伴わない遺物については、実測図(第57図)及び観察表を掲載する。

### (1) 土坑



第56図 その他の土坑出土遺物実測図

その他の土坑出土遺物観察表（第56図）

第6号土坑

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	甕	—	(38)	—	長石・石美	靑灰	普通	頸部地張帯 体部割がれ	覆土中	5% PL14

第48号土坑

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
1	砥石	102	8.0	4.0	4612	硬砂岩	片面中央部に敲打痕	側面敲打痕	覆土中	PL15

第55号土坑

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
1	不明鉄製品	4.0	1.6	1.3	(837)	鉄	筒状 片端潰れ	中央部の一部欠損	覆土中	

第83号土坑

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	甕	(240)	(7.4)	—	長石・石美	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラナデ	覆土下層	20%

第120号土坑

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
1	砥石	104	(9.3)	1.6	(2013)	硬砂岩	紙面2面	上・下面に磨り痕	覆土中	

表5 その他の土坑一覧表

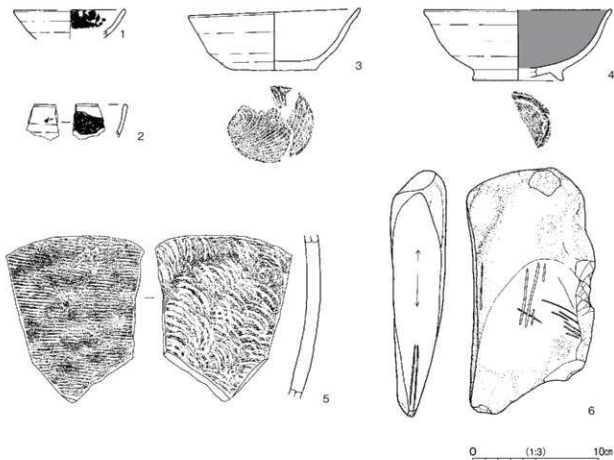
番号	位置	長径方向	平面形	規 格		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (cm)	深さ (cm)					
1	A 2f0	N-25°-E	精円形	1.21×0.88	24	直立	平皿	自然		
2	A 3d2	—	円形	0.86×0.84	18	縦斜	平皿	自然		
3	A 3d2	N-28°-W	精円形	0.63×0.55	17	外傾	平皿	自然		
4	A 2g0	—	円形	0.51×0.49	16	(1)12直立	平皿	自然		
5	A 3b4	N-45°-E	精円形	0.81×0.63	30	外傾	平皿	自然	須恵器	
6	A 3b4	N-30°-W	精円形	0.86×0.65	54	直立	平皿	自然	土師器、須恵器	SK 9→本路
7	A 3b5	N-22°-E	精円形	0.76×0.63	31	外傾	平皿	自然		
8	A 3b1	N-10°-E	精円形	0.85×0.66	30	外傾	円凸	自然		
9	A 3b1	N-7°-E	精円形	0.77×0.62	34	外傾	有段	自然		本路→SK 6
10	A 3e2	—	円形	0.23×0.22	37	直立	皿状	自然		
12	A 2b7	—	円形	0.23×0.22	18	(1)12直立	平皿	自然		
13	A 2b7	N-44°-W	精円形	0.21×0.17	22	直立	平皿	自然		
14	A 2b7	N-27°-W	精円形	0.24×0.20	30	直立	皿状	自然		
15	A 2f7	N-45°-E	精円形	0.50×0.30	35-38	直立	有段	人為		
16	A 2f8	N-57°-E	精円形	0.27×0.23	40	直立	平皿	自然		
17	A 2f7	—	円形	0.31×0.30	45	直立	平皿	自然		
18	A 2f7	—	円形	0.22×0.21	30	直立	皿状	自然		
21	A 2f9	—	円形	0.27×0.27	32	直立	平皿	自然		
22	A 3g3	—	円形	0.21×0.20	36	直立	皿状	自然		
23	A 3d3	—	円形	0.22×0.20	36	(1)12直立	皿状	自然	須恵器	
24	A 3e3	—	円形	0.55×0.53	20	縦斜	平皿	自然		
26	B 2a0	N-17°-W	精円形	0.57×0.44	17	(1)12直立	平皿	自然		
27	B 2a0	N-51°-E	方形	0.70×0.67	17	外傾	平皿	自然		

番号	位置	長径方向	平面形	規 格		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
28	A 2j9	—	円形	0.84 × 0.81	22	外傾	平坦	自然	土師器	
29	A 2j9	—	円形	0.99 × 0.97	47	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	
30	A 2j7	N-10°-W	楕円形	0.78 × 0.67	13	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	
31	B 2b7	N-38°-E	楕円形	1.04 × 0.93	18-22	外傾	平坦	自然	土師器	
32	A 2j7	—	円形	0.36 × 0.36	14	直立	平坦	自然	土師器	
33	A 3a8	—	円形	0.85 × 0.80	23	直立	平坦	自然	土師器	
35	B 2b9	—	円形	0.95 × 0.90	23	外傾	平坦	自然	土師器	
36	A 2a6	—	円形	0.23 × 0.22	44	直立	平坦	自然	土師器	
37	A 3j5	N-11°-E	楕円形	1.24 × 0.89	30	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	
39	A 2a6	N-57°-W	楕円形	0.90 × 0.75	20	外傾	平坦	自然	土師器	
40	A 2a6	—	円形	0.62 × 0.58	15	緩斜	平坦	自然	土師器	
41	A 2j7	N-86°-E	楕円形	0.65 × 0.58	24	緩斜	凹状	自然	土師器	
42	A 2b7	N-37°-W	楕円形	0.21 × 0.19	26	直立	凹状	自然	土師器	
43	A 2b7	—	円形	0.25 × 0.23	40	直立	凹状	自然	土師器	
44	A 2j7	—	円形	0.66 × 0.65	20	緩斜	有段	自然	土師器	
45	B 2b0	N-39°-E	楕円形	1.00 × 0.89	41	直立	平坦	自然	土師器	
46	B 2b9	—	円形	0.94 × 0.86	30	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	本跡→SI 1 P 1
47	B 2b9	—	円形	1.03 × 0.95	36	ほぼ直立	平坦	自然	土師器、種子(焼)	
48	B 2b9	—	円形	1.06 × 0.97	35	ほぼ直立	平坦	自然	土師器、須恵器、石器	
50	B 2e9	—	円形	0.76 × 0.74	28	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	
51	B 2e9	—	円形	1.02 × 0.97	29	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	
53	B 2d8	N-15°-E	楕円形	1.07 × 0.89	46	ほぼ直立	平坦	自然	土師器、石器	
54	B 2d9	N-18°-E	楕円形	1.02 × 0.70	31	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	
55	B 2c0	—	円形	0.93 × 0.86	24	ほぼ直立	平坦	自然	土師器、須恵器、金属製品	
61	B 3c1	N-13°-E	楕円形	0.32 × 0.25	23-28	ほぼ直立	傾斜	自然	土師器	
62	B 2d9	—	円形	0.83 × 0.80	31	外傾	平坦	自然	土師器	
64	B 3d1	N-5°-E	楕円形	1.17 × 1.08	41	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	
65	B 3d1	N-10°-E	楕円形	1.32 × 1.12	57	直立	平坦	自然	土師器	
66	B 3e1	N-12°-E	不整形円形	1.60 × 1.44	28	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	
67	B 3e2	—	円形	0.87 × 0.86	14	外傾	平坦	自然	土師器	
68	B 2d9	—	円形	0.86 × 0.82	35	外傾	有段	自然	土師器	SK83→本跡
69	B 2d9	N-20°-E	楕円形	0.88 × 0.65	36	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	
70	B 2e9	N-87°-W	楕円形	1.05 × 0.93	11-18	外傾	平坦	自然	土師器	
71	B 2e8	N-75°-E	楕円形	0.60 × 0.53	17	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	
72	B 2f8	N-4°-E	楕円形	1.26 × 1.13	77	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	SI 5→本跡
73	B 2d7	N-9°-W	楕円形	1.12 × 0.98	35	ほぼ直立	平坦	自然	土師器、雑	SI 4→本跡
74	B 3c2	—	円形	0.90 × 0.90	35	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	
76	B 2e8	N-16°-E	楕円形	0.85 × 0.66	18	外傾	平坦	自然	土師器	本跡→SK77
77	B 2e8	N-8°-W	楕円形	0.38 × 0.33	66	直立	凹状	自然	土師器	SK76→本跡
78	B 3b2	N-65°-E	楕円形	1.10 × 0.96	22	外傾	平坦	自然	土師器	SI 3→本跡
79	B 2e3	N-5°-E	楕円形	1.12 × 1.01	12	緩斜	平坦	自然	土師器	
80	B 2d3	—	円形	1.13 × 1.06	16	外傾	平坦	自然	土師器	
81	B 2e4	—	円形	1.07 × 0.99	17	外傾	平坦	自然	土師器	
82	B 3d1	—	円形	1.43 × 1.32	52	ほぼ直立	平坦	自然	土師器、須恵器	
83	B 2d9	N-5°-E	楕円形	1.45 × 1.28	40	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	本跡→SK68
84	B 3d1	N-26°-E	楕円形	0.29 × 0.25	43	直立	平坦	自然	土師器	
85	B 2d0	N-8°-W	楕円形	1.77 × 1.36	30	直立	平坦	自然	土師器	

番号	位置	長径方向	平面形	楕圓		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
86	B 2b8	N-50°-E	精円形	0.79×0.66	25	直立	平坦	自然	土師器	
87	B 3h1	—	円形	0.79×0.76	19	外傾	平坦	自然		SI 8→本跡
88	B 2g8	—	円形	0.94×0.87	41	ほぼ直立	平坦	人為		SI 5→本跡
89	B 3d3	N-2°-E	精円形	0.90×0.67	29	緩斜	皿状	自然	土師器	
91	B 2d9	N-67°-E	精円形	0.97×0.87	18-20	外傾	凹凸	自然	土師器	
94	B 2f9	N-5°-W	精円形	2.11×1.61	27-33	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	
95	B 3i1	—	円形	0.82×0.78	37	直立	平坦	自然	土師器	SI 8→本跡
96	B 3b1	N-6°-E	精円形	0.76×0.65	29	直立	平坦	自然	土師器	SI 3→本跡
98	B 2d7	N-41°-W	精円形	1.16×0.97	38	ほぼ直立	平坦	自然		SI 4→本跡
99	B 2b0	N-62°-W	精円形	0.86×0.76	39	直立	平坦	自然		SI 8→本跡
102	C 3a1	—	円形	0.57×0.55	12	ほぼ直立	平坦	自然		
103	B 3c7	N-35°-E	精円形	0.75×0.66	11	外傾	平坦	自然		
107	C 3b3	N-18°-E	精円形	0.87×0.71	30	外傾	平坦	自然		
109	B 3a6	—	円形	0.17×0.16	17	直立	平坦	自然		
110	B 3a6	—	円形	0.25×0.24	21	直立	平坦	自然		
111	B 3b7	N-77°-W	精円形	0.19×0.16	12	直立	平坦	自然		
112	B 3a7	N-89°-E	精円形	0.25×0.21	21	直立	平坦	自然		
113	A 3j7	—	円形	0.21×0.20	14	ほぼ直立	平坦	自然		
115	B 2b0	N-83°-W	精円形	0.74×0.59	29	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	
116	C 3a2	—	円形	0.66×0.65	30	外傾	平坦	自然	土師器	
117	B 2i0	—	円形	0.93×0.86	50	ほぼ直立	平坦	自然	土師器	
120	B 3b3	N-21°-E	精円形	0.77×0.53	26	外傾	平坦	自然	土師器、石器	SK125→本跡
121	B 3b3	—	円形	0.93×0.91	34	緩斜	平坦	自然		SK125→本跡
122	B 3b3	—	円形	0.49×0.46	44	外傾	皿状	自然		SK123と接する
123	B 3b3	N-7°-W	精円形	0.60×0.48	39	外傾	皿状	自然		SK122と接する
135	B 2g8	N-10°-E	精円形	0.62×0.55	70	直立	平坦	自然	土師器	SI 5→本跡
138	B 3b3	—	円形	0.68×0.66	55	外傾	平坦	自然		本跡→SI 2
131	B 3b3	N-16°-E	精円形	1.12×0.91	60	直立	平坦	自然		SI 2→本跡 →SK132
132	B 3c3	N-77°-W	精円形	0.64×0.49	62	直立	皿状	自然	土師器	SI 2、SK131→本跡



## (2) 遺構外出土遺物



第 57 図 遺構外出土遺物実測図

## 遺構外出土遺物観察表 (第 57 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	杯	[8.7]	(23)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面漆付着	表探	5% PL14
2	土師器	杯	—	(28)	—	長石・石英	橙	普通	体部外・内面漆付着	表探	5% PL14
3	土師器	杯	13.6	4.9	6.8	長石・石英・雲母・赤色粒子・繊維	橙	普通	体部外面ロクロナデ 底部斜転木切り 摩滅が著しい	表探	60% PL10
4	土師器	高台付杯	[14.7]	5.6	[7.0]	長石・石英・雲母・繊維	にぶい	焼	外面ロクロナデ 内面黒色処理 摩滅が著しい	表探	20% PL11
5	須恵器	壺	—	(13.2)	—	長石・石英・繊維	黄灰	普通	体部外面斜位の平行押き 内面同心円文の当具痕	表探	5% PL15
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
6	砥石	19.4	10.1	4.4	888.2	砂岩	砥面4面	上面・側面に磨り痕 側面に磨面	表探		

## 第4節 総 括

### 1 はじめに

調査によって、平安時代の堅穴建物跡10棟、掘立柱建物跡2棟、土坑17基のほか時期不明の土坑99基を確認した。

当遺跡は、北からの久慈川と西からの押川が小久慈付近で合流した後、東へ向きを変え大きく蛇行をはじめたことにより形成された下位河岸段丘の平坦部に位置している。下位河岸段丘は、舌状に延びる中位河岸段丘の先端部を取り囲むように久慈川との間に広がり、中位河岸段丘との高低差が20mほどある。段丘崖から川岸までは北側が約360m、南側が約160m、東側が約110mとなっており、段丘崖北側に位置する当遺跡と南側に位置する橋元遺跡とは、連続する平坦部に位置している。

橋元遺跡は、平成17・22年度に発掘調査が行われ、平成24年度に『当財団文化財調査報告』第356集<sup>1)</sup>として報告されている。その中で平安時代について、建物の変遷、竈の形態が系統化されており、今回の調査成果との類似点が多く見られる。そこで、ここでは今回の調査成果について、橋元遺跡の調査成果を参考にしながら分類を行い、若干の考察を加えまとめる。

### 2 遺構の変遷

今回確認した平安時代の遺構は、10世紀前葉の堅穴建物跡6棟(第1～4・7・8号)、掘立柱建物跡1棟(第2号)、土坑9基(第11・19・20・34・118・119・125・129・130号)、10世紀中葉の堅穴建物跡3棟(第5・6・9号)、掘立柱建物跡1棟(第1号)、土坑5基(第25・52・75・93・97号)、10世紀後葉の堅穴建物跡1棟(第10号)、土坑1基(第90号)、11世紀中葉の土坑2基(第49・114号)である。遺構以外に自然流路を確認している。10世紀後葉の第10号堅穴建物跡は自然流路により削平されている。平面だけでなく、調査区際の壁面で、いくつもの自然流路跡が確認でき、遺跡内は何度も久慈川の氾濫、あるいは山崩れにより土砂が流入していたことが分かる。

橋元遺跡では、9世紀中葉から11世紀中葉にかけて37棟の堅穴建物跡が確認されており、6時期(Ⅰ期9世紀中葉、Ⅱ期9世紀後葉、Ⅲ期10世紀前葉、Ⅳ期10世紀中葉、Ⅴ期10世紀後葉、Ⅵ11世紀中葉)に区分けされている。当遺跡で確認した堅穴建物跡は、橋元遺跡のⅢ期～Ⅴ期に該当する。

遺構と遺物について、橋元遺跡と比較しながら当遺跡の特徴を考察していく。また、10世紀代の大子地方は「陸奥国白河郡依上」に属しており、福島県白河市の関和久遺跡が白河郡衙跡に比定されているため、福島県内の遺跡との共通点も考察してみたい。

#### (1) 堅穴建物跡と竈の特徴について

当遺跡で確認できた10棟の堅穴建物跡のうち形状がはっきりしない第10号堅穴建物跡を除いた9棟を、橋元遺跡に従い、A～Cの形態に分類した。A～Cの形態は次の通りである。

- A 平面形が正方形
- B 平面形が長方形で、長辺に竈が付設される形態
- C 平面形が長方形で、短辺に竈が付設される形態

正方形と長方形の判断基準は建物の長軸を短軸で割り、1.1未満を正方形、1.1以上を長方形として分類した。また、隅丸長方形は長方形として分類している<sup>21</sup>。これに倣い、当遺跡の竪穴建物跡を分類し、比較した(第58図参照)。当遺跡ではA・C形の割合が少なくなっている。A形は集落の形成期である9世紀に多く見られるもので、集落内での移住と考えられる。B形は橋元遺跡の35%と比べると、当遺跡が56%と多くみられ、当遺跡内で10世紀前葉に人口の増加したことがうかがえる(表6参照)。

表6 竪穴建物跡の形態分類集計表

	A形		B形		C形		合計
	中道遺跡	橋元遺跡	中道遺跡	橋元遺跡	中道遺跡	橋元遺跡	
I期(9c中葉)	0	1	0	0	0	0	1
II期(9c中葉)	0	5	0	0	0	0	5
III期(10c前葉)	2	4	3	7	1	3	20
IV期(10c中葉)	0	1	2	1	1	0	5
V期(10c後葉)	0	0	0	0	0	1	1
小計	2	11	5	8	2	4	
合計	13		13		6		32

集落の形成されるI・II期は建物の形態が画一的であり、III期に入ると形態のバリエーションが増えたことから、新しい文化圏からの集団が当集落に移り住んだと考えることができる<sup>31</sup>。このことは、III期に集落が拡大されていくことの一つの理由となりえる。

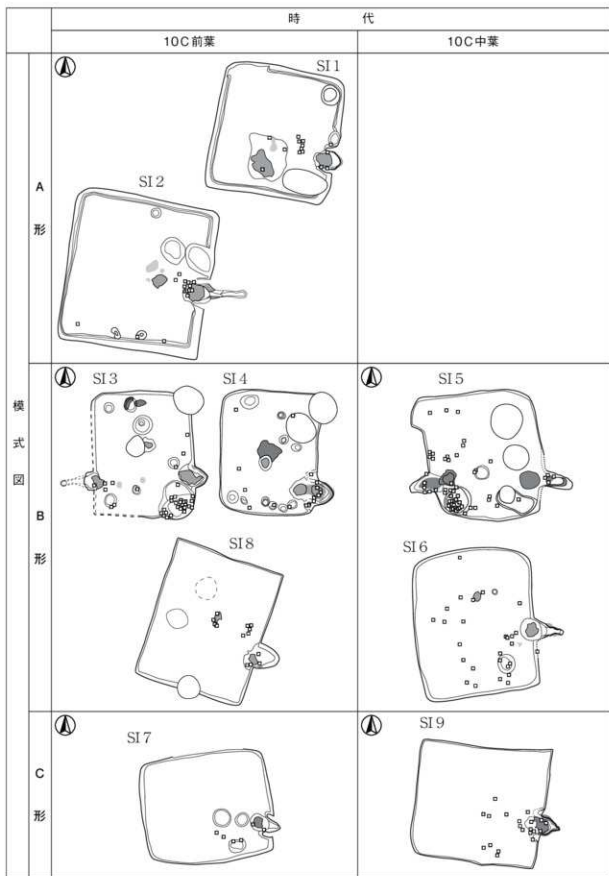
当遺跡の竪穴建物跡の特徴を、橋元遺跡と比較しながら考察していく。

まず、主柱穴に注目する。主柱穴が確認できたものは10棟中2棟のみである。第2号竪穴建物跡は建物中央線上の南北に、第4号竪穴建物跡が建物西側の南北にそれぞれ対となって確認できた。一方、主柱穴を四隅に配置した竪穴建物跡は確認できなかった。このことは平安時代の竪穴建物跡37棟が確認された橋元遺跡でも確認されておらず、当遺跡より下流に位置する番城内遺跡で確認された竪穴建物跡13棟のうち1棟で確認されているだけである<sup>41</sup>。こうした様相は地域的な特徴と考えることができる。

次に竈の付設に注目する。竈は10棟すべての建物跡で確認できており、9棟が東壁に付設されている。内2棟(第3・5号竪穴建物跡)は、東西に竈が付設されている。どちらも東竈を解体後、西竈を新設している。また、10棟中6棟(第1～4・6・8号竪穴建物跡)では竈と炬とが併設されている。橋元遺跡では、前者は2棟確認されており、両竈を廃絶時まで併設している点で違いが見られる。後者は1棟確認されており、炬を併設していることから、工房跡の可能性があるとしている。当遺跡内においては、後に論じる製糸に関わる工房の可能性があると考えられる。

谷川氏は竈の形態について、「東日本のうちで、関東と東北との違いは、カマド形態と方位に歴然と現れる。関東ではA類(煙道口の壁への切り込みが見られない)からE類(煙道口を壁に大きく掘り込むもので焚口が壁面と合致する)への変遷がみられるのに対し、東北は初現期からF類(屋外へ長く伸びる煙道)内での変化が中心となる。方位は関東の北向きに対し、東北では東及び南向きが一般的である<sup>51</sup>」と、分類している。このことを踏まえ、当遺跡の竈を分類してみる。

まず、竈が付設されている方位は、東竈が9基で、西竈が2基である。2基の西竈はどちらも東竈が解体された後、作り替えられたものである。

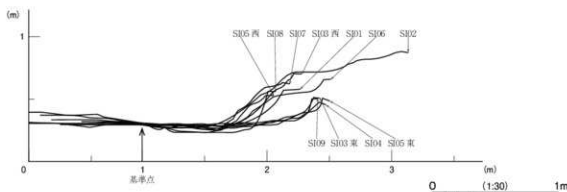


※ □は各建物跡から出土した礎の位置を示している。

0 2m

第58図 中道遺跡竪穴建物跡分類図

次に、竈の形態で分類してみると、屋外へ長く伸びる煙道部が確認できたのは、第2号竈穴建物跡の竈と、第3号竈穴建物跡の西竈である。他の竈は、煙道部があったと思われる高さの地山が削平されてしまっていることから、煙道部を確認することができなかった。そのため、煙道部が残っている2基の竈の火床面を基準点とし、火床面から煙道部にかけての立ち上がりの断面を、他の竈9基と比較したところ、2つのグループに分類することができた（第59図参照）。



第59図 中道遺跡竈断面図

1つのグループは、第3・5号竈穴建物跡の西竈と第1・2・6～8号竈穴建物跡の竈7基で、煙道部の残っていた2基の竈と同じ立ち上がりのラインを示すことから、煙道部が屋外へ長く伸びる竈に属するものと推測できる。さらに、このグループは炉を併設しており、鉄製紡錘車が出土している第2・3号竈穴建物跡が含まれる。炉を併設し、類似した竈のつくりをする建物跡であることから、紡錘車の出土していない5棟の竈穴建物跡も製糸に関わる工房跡の可能性が高い。

もう1つのグループは、第4・9号竈穴建物跡と第3・5号竈穴建物跡の東竈の4基で、火床面が壁面よりも内側に寄っている特徴が見られる。このグループのもう一つの特徴として、覆土中から多くの礫が出土している（表7・8参照）。第1・5号竈穴建物跡（東竈）は、久慈川流域や八溝山系で産出される石材を構築材として使用していることが確認できている。この2棟に加え、第3・4号竈穴建物跡の覆土中やピット内からは被熱した礫が多く出土しており、竈構築材として使用されていた可能性が高い。特に東西に2基の竈を有する第3・5号竈穴建物跡は、共に東竈が先に解体されており、その解体時に被熱した竈構築材と考えられる礫は、新設する西竈には転用せず、貯蔵穴であったであろうピット内に廃棄している。橋元遺跡では、同じように覆土中から多くの礫が出土しているが「使用痕はなく用途については不

表7 竈穴建物跡出土礫集計表

		SI1	SI2	SI3	SI4	SI5	SI6	SI7	SI8	SI9	SI10	合計
礫	被熱有	個数	23	12	33	18	35	5	1	3	0	130
		総重量 (g)	29,257	9,290	34,627	17,365	39,855	5,559	86	5,889	0	141,928
	被熱無	個数	4	29	13	3	26	23	5	9	19	133
		総重量 (g)	103	6,818	21,117	4,872	46,171	18,290	5,604	21,289	31,531	3,822
合計	個数	27	41	46	21	61	28	6	12	19	2	263
	総重量 (g)	29,360	16,108	55,744	22,237	86,026	23,849	5,690	27,178	31,531	3,822	301,545

明である<sup>6)</sup>』としており、被熱を受けていたとの記述はされていない。また、番城内遺跡の第12号堅穴建物跡でも同じようにピット内から礫が出土していることは、使用後に廃棄した共通の事例である。

これらのことから、当遺跡で確認できた堅穴建物跡に付設された竈は、本県域で確認されている竈よりも、東北地方によくみられる特徴を色濃く表している。

表8 堅穴建物跡出土被熱礫の分類集計表

	SI1	SI2	SI3	SI4	SI5	SI6	SI7	SI8	SI9	SI10	合計
被 熱 礫	凝灰岩		1	7	3	12					23
	凝灰角礫岩	2		1		1					4
	角礫凝灰岩					4					4
	砂質凝灰岩					1					1
	板礫岩					1					1
	細礫岩	1							1		2
	硬砂岩	1	2	11	5	3	2				24
	砂岩	14	2	10	2	7	1				36
	砂岩ホルンフェルス		1	2	2	1					6
	粗粒砂岩		1		1	1	1				4
	閃緑岩		1				1	1	1		4
	アイサイト(安山岩)		1								1
	花崗岩	5	3	1	2	2					11
	花崗閃緑岩			1	2	1					4
	斑レイ岩				1						1
	不明										0
アブライト					1					1	
ホルンフェルスベグマタイト								1		1	
合計	23	12	33	18	35	5	1	3	0	0	130

(2) 出土遺物からみた集落の性格について

今回の調査では鍛冶関連遺構は確認できなかったが、鉄製品が19点出土している。その内訳は10世紀前葉のものが多く、刀子2点(第2号堅穴建物跡)や鉄製紡錘車4点(第2・3号堅穴建物跡、第19・20号土坑)など計16点出土している。橋元遺跡では、鍛冶関連遺構が確認され、10世紀前葉に比定される鉄製品が13点出土しており、出土時期に共通点が見られる。(表9・10参照)

表9 中道遺跡出土生業遺物点数表

	鉄製品						土・石製品		合計
	農具	工具	武器	紡錘車	建築具	他	紡錘車	渡舟具	
9c後	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10c前	0	0	2	4	4	6	0	0	16
10c中	0	0	1	0	2	0	0	1	4
10c後	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	0	0	3	4	6	6	0	1	20

表10 橋元遺跡出土生業遺物点数表

	鉄製品						土・石製品		合計
	農具	工具	武器	紡錘車	建築具	他	紡錘車	渡舟具	
9c後	0	0	3	0	1	2	0	3	9
10c前	1	0	5	1	5	1	0	6	19
10c中	0	1	1	0	0	1	0	0	3
10c後	0	0	1	0	0	0	0	0	1
合計	1	1	10	1	6	4	0	9	32

当遺跡で出土数の多かった鉄製紡錘車に注目する。古庄浩明氏は鉄製紡錘車を、「衣・食・住」といわれるごとく、衣服は人間の生活の根本をなす物の一つとされている。衣服は、皮や布によって作られているが、そのうち、布は古代において衣服としてばかりでなく「調布」などの税として社会経済の基礎をな

すものであった<sup>7)</sup>とし、布の原料である糸をつむぐための道具としている。衣服は生活必需品として、また、中央への貢納品として需要がある。供給を安定させるためには、一定の水準で、一定の量を生産する体制を整える必要がある。その中の一つが規格化された鉄製紡錘車の普及であり、もう一つは紡織工程の分業制の確立であると考えられる。

まず、鉄製紡錘車の普及については、「鉄製紡錘車は7世紀に出現し、8世紀以降社会に普及しており<sup>8)</sup>、関東地方では8世紀に出現し、9世紀以降に急増する<sup>9)</sup>」とされており、今回出土した紡錘車もこの時期に当てはまる<sup>10)</sup>。

茨城県域と福島県域で出土している紡織具を表11・12で比較してみると、鉄製紡錘車が急増するのは9世紀に入ってからと共通点が見られる<sup>11)</sup>。土製・石製紡錘車は茨城県内だけで見ると、鉄製と同じように個体数が増加している。中沢悟氏は、「鉄製の紡錘車が使用されたとしても主体を占めるのは依然として石製であり、鉄製が石製に交代するような現象は認められない<sup>12)</sup>」としているが、一方で東村純子氏は、「鉄製紡錘(つむ)が他の鉄器への再利用により遺存しにくい性質があることを考慮するならば、8世紀以降は鉄製紡錘を志向した<sup>13)</sup>」としている。

一定の水準を保ちながら大量生産を行うためには、規格化された道具が最低限必要である。一方で布を織る以外に、布を縫う細い糸、漁具の網を作る太い糸など、様々な種類の糸を生産しなければ生活に支障が出てしまうであろう。しかし、今回の調査では、遺存しにくいとされている鉄製紡錘車は出土しているが、土製・石製紡錘車は出土していない。さまざまな種類の糸をつくるためには、規格化された鉄製紡錘車と、意図的な作り分けをしている可能性のある土製・石製紡錘車は共存すると考えられるが、その事実はこの調査では認められなかった。

次に、製糸と製織の分業について考察してみる。製糸と製織の分業は、生産効率に優れている。麻の栽培から布の織成までのうち、一冬もしくは通年がかりで1人当たり1～2反分の糸をつくり、半月から1か月で織物に仕上げる。麻の製糸は多大な労力と手間を要するのに対して、布の製織は少数の人手によって短期間で行うことができる<sup>14)</sup>。貢納品としての織物を安定して生産するには、手間のかかる製糸は官衙周辺の各集落によって行われ、集落で生産された糸を集積し、設備の整った官衙の工房で織成する分業制が、効率が良いと考えられる。県域出土の紡錘車を集落遺跡と官衙遺跡と比べてみると、圧倒的に集

表11 茨城県出土生業遺物点数表

	鉄製品						土・石製品		合計
	農具	工具	武器	紡錘具	建築具	他	紡錘車	磨石	
7c前	30	2	43	3	3	1	61	583	726
7c後	36	4	52	2	51	0	34	231	410
8c前	62	8	75	10	21	3	79	599	857
8c後	90	15	176	10	60	10	80	473	914
9c前	107	21	131	22	86	5	98	211	681
9c後	119	23	108	29	150	23	141	282	875
10c前	26	4	40	11	92	1	33	506	713
10c後	13	2	20	6	5	0	15	30	91
11c前	8	0	43	5	3	0	4	35	98
11c後	1	3	14	3	1	0	3	19	44
12c前	0	1	0	0	4	0	0	0	5
12c後	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	492	83	702	101	476	43	548	2969	5414

表12 福島県出土生業遺物点数表

	鉄製品						土・石製品		合計
	農具	工具	武器	紡錘具	建築具	他	紡錘車	磨石	
7c前	9	15	8	0	0	0	48	13	93
7c後	5	19	11	1	7	0	18	23	84
8c前	11	28	10	7	10	0	15	9	90
8c後	15	71	26	5	40	1	7	14	179
9c前	40	162	23	14	48	1	10	66	364
9c後	22	49	16	11	14	0	1	82	195
10c前	2	32	14	8	8	0	1	122	187
10c後	3	7	0	0	5	0	0	1	16
11c前	0	3	0	0	1	0	0	0	4
11c後	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12c前	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12c後	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	107	386	108	46	133	2	100	330	1212

落遺跡からの出土が多くなっている<sup>55)</sup>。鉄製紡錘車により集落で動植物の繊維を加工して糸をつくる製糸と、地方官衙で経(たていと)を揃えて織物をつくる製織が、分業化されていた<sup>56)</sup>ことを裏付けている。当遺跡内で生産された麻糸は、久慈川の水運を利用し集積され、製織が行われる白河郡衙へと運び込まれていたであろう。

以上のことに加え、当遺跡では、鉄製紡錘車が多く出土していることや、稲作に適しているとはいえなが耕地面積が広いことなどの集落の立地条件から、麻等の植物が栽培され、製糸が行われていたことが推測できる。また、土製・石製紡錘車が出土していないことは、製糸を生業とする人々の居住域は当遺跡の範囲外にまで広がっていたことも推測される。

別の土製品に注目すると、橋元遺跡で9点出土している管状土錘が、当遺跡からは1点しか出土していない。久慈川がすぐそばにあり、漁業を行う上では必要な道具であったと考えられ、当遺跡内からも出土してもおかしくない遺物である。今回の調査範囲が極めて狭い範囲であったことや、橋元遺跡と比べると川筋からは離れていることを考慮しても管状土錘の出土が極端に少ないと思われる。このことから、当遺跡の住人が漁業に従事していたことは考えにくく、集落内で分業化がなされていたことが推測される。橋元遺跡で鍛冶工房跡が確認されていることも、分業化されていたことの一例ではないだろうか。

### 3 おわりに

以上のことから、当遺跡と橋元遺跡は同一の集落であったと考えられ、先に述べた、久慈川右岸に形成された、わずかに広がる下位河岸段丘面での集落の盛衰がうかがえる。

I～Ⅲ期にかけて久慈川右岸に広がる下位河岸段丘面に集落が形成されていく。当遺跡での竪穴建物の出現は、橋元遺跡で最も多く建物跡が確認されたⅢ期である。集落はⅢ期に最盛期を迎え、集落が手狭になったことから、居住域を当遺跡にまで範囲を広げたことが考えられる。あるいは、集落内での分業化が進み、職種による住み分けが行われた結果、製糸業を生業とする集団が、当遺跡内に住居を構えた可能性が考えられる。

Ⅳ期からは衰退期となり、徐々に集落域は縮小していく。調査が行われていない当遺跡外に取まる規模となり、当遺跡内では集落の営みがⅤ期以降見られなくなる。立地条件の良い範囲に集約されていき、11世紀まで続いていたと考えられる。

当遺跡の遺構・遺物に触れて様相を概観した。今回の調査は道路新設のために行われた調査であり、下位河岸段丘面のほんの一部にすぎない。集落の全容を推し量るには不十分であるが、遺跡の画期や特徴を捉えることができたと考ええる。当遺跡が所在する大子町周辺での調査事例は少なく、歴史的様相が判然としない点が多い。今回は調査成果の確認に留まったが、社会・政治情勢をふまえた上で、集落の在り方や、周辺遺跡との関連など更に検討が必要である。当遺跡が「陸奥国白河郡」に所属していたことから福島県側との比較検討が不十分な点については今後の課題としたい。

#### 註

- 1) 長津盛男「橋元遺跡 国道118号袋田バイパス道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財団文化財調査報告 第356集 2012年3月
- 2) 註1に同じ
- 3) 註1に同じ



- 4) 柴田博行「一般国道 118 号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書 番城内遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告第 126 集 1997 年 6 月
- 5) 谷 旬「古代東国のカマド」『千葉県文化財センター研究紀要』7 1982 年 3 月
- 6) 註 1 に同じ
- 7) 古庄浩明「鉄製紡錘車の研究」『國學院大學考古学資料館紀要』第 8 輯 國學院大學考古学資料館 1992 年 3 月
- 8) 古庄浩明「古代における鉄製農具の所有形態」『考古学雑誌』第 79 巻 第 3 号 1994 年
- 9) 松田真一「鉄製紡錘車とその出土遺跡」『宇陀・丹切古墳群奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 30 冊 1975 年
- 10) 表 9 参照
- 11) a 瀧美賢吾「茨城県の古代生業」『一般社団法人日本考古学協会 2011 年度栃木大会研究発表資料集』2011 年  
b 菅原祥夫「福島県の古代生業」『一般社団法人日本考古学協会 2011 年度栃木大会研究発表資料集』2011 年
- 12) 中沢 悟「紡錘車の基礎研究 (2)」『専修考古学』第 6 号 1996 年
- 13) 東村純子「考古学からみた古代日本の紡織」2011 年
- 14) 註 13 に同じ
- 15) 註 11 a に同じ
- 16) 註 13 に同じ

#### 引用・参考文献

- 櫻村宣行「那珂川以北を中心とする「切石組み竈」の一考察」『領域の研究－阿久津久先生還暦記念論集－』2003 年 4 月
- 櫻村宣行「切石組み竈」の一考察－那珂川以南を中心として－『考古学の深層－瓦吹堅先生還暦記念論集－』2007 年 1 月
- 櫻村宣行「切石組み竈」の一考察－最終章－『列島の考古学Ⅱ－渡辺誠先生古稀記念論集－』2007 年 11 月
- 木村光輝・駒澤悦郎・中泉雄太・長洲正博「茨城県内における竈溝竈の竪穴建物跡について (1)」『埋蔵文化財 年報 第 34 <平成 26 年度>』公益財団法人茨城県教育財団 2015 年 6 月
- 木村光輝・駒澤悦郎・長洲正博「茨城県内における竈溝竈の竪穴建物跡について (2)」『研究ノート』第 14 号 公益財団法人茨城県教育財団 2017 年 6 月
- 駒澤悦郎「茨城県内における竈溝竈の竪穴建物跡について (3)」『研究ノート』第 15 号 公益財団法人茨城県教育財団 2018 年 10 月
- 駒澤悦郎「茨城県北部における竈構造の変化」『研究ノート』第 16 号 公益財団法人茨城県教育財団 2019 年 7 月
- 丹治篤嘉「カマド燃焼部における遺物出土状況の検討」『研究紀要 2009』財団法人福島県振興事業団 2010 年 3 月
- 佐々木義則・早川麗司「茨城県における東北地方からの移民の痕跡」『俘囚・夷俘』とよばれたエミシンの移配と東国社会』帝京大学文化財研究所・山梨県考古学協会 2017 年 11 月
- 堤 隆「住居発掘時における竈解体をめぐって－竈祭祀の普遍性の側面－」『東海史学』第 25 号 1991 年 3 月
- 堤 隆「竪穴建物発掘時のカマド解体とその意味」『考古学ジャーナル』No.559 2007 年 6 月
- 江崎良夫「原田遺跡群出土紡錘車について (1)」『研究ノート』第 4 号 財団法人茨城県教育財団 1994 年 6 月
- 三浦正人「紡錘車について」『常陸部原遺跡 茨城県東海村教育委員会 1982 年 9 月
- 堀田孝博「古代における鉄製紡錘車普及の意義について」『神奈川考古』第 35 号 神奈川考古同人会 1999 年 5 月
- 大土周三「紡錘車からみた製糸活動の一端」『神奈川考古』第 52 号 神奈川考古同人会 2016 年 5 月
- 中沢 悟「紡錘車の基礎研究 (1)」『研究紀要』第 13 号 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996 年 3 月

写 真 图 版



平安時代出土土器





遺跡遠景（西から）



遺跡全景（鉛直）

PL2



第1～3号竖穴建物跡



第4～9号竖穴建物跡

第1号竖穴建物跡  
遺物出土状況



第1号竖穴建物跡竈



第1号竖穴建物跡



PL4



第2号豎穴建物跡  
紡錘車出土状況



第2号豎穴建物跡  
竈遺物出土状況



第2号豎穴建物跡竈



第2号竖穴建物跡



第3号竖穴建物跡  
西甕遺物出土状況



第3号竖穴建物跡



PL6



第4号豎穴建物跡



第5号豎穴建物跡  
遺物出土狀況



第5号豎穴建物跡  
西竈遺物出土狀況



第5号竖穴建物跡西竈



第6号竖穴建物跡  
高台付椀出土状況



第6号竖穴建物跡  
小皿出土状況

PL8



第6号竖穴建物跡



第9号竖穴建物跡  
竈遺物出土状況



第9号竖穴建物跡



第11号土坑



第34号土坑遺物出土状況



第75号土坑遺物出土状況



第93号土坑



第114号土坑



第125号土坑



第2号竖穴建物跡，第75・130号土坑，遺構外出土土器



第5・6号竖穴建物跡，第52・118・119・130号土坑，遺構外出土土器



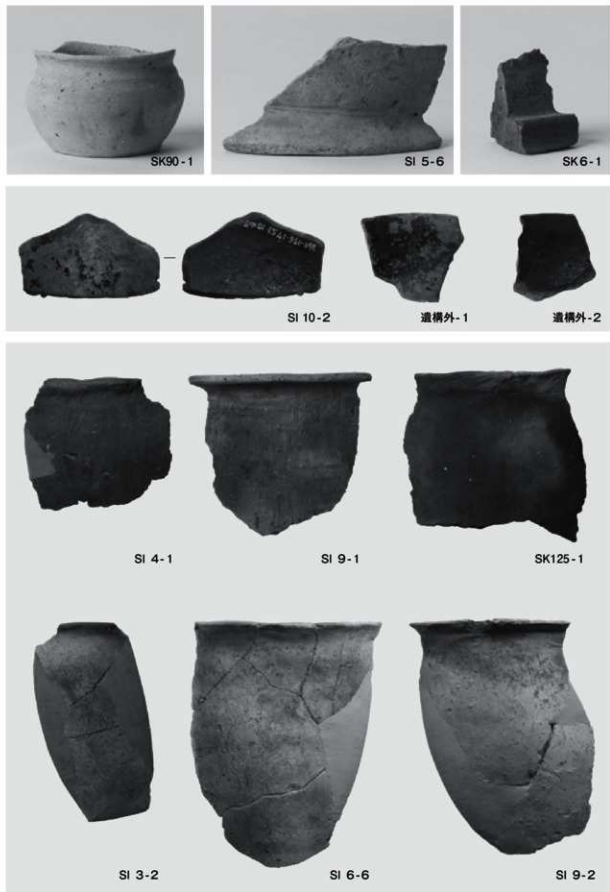
第2～5号竖穴建物跡出土土器



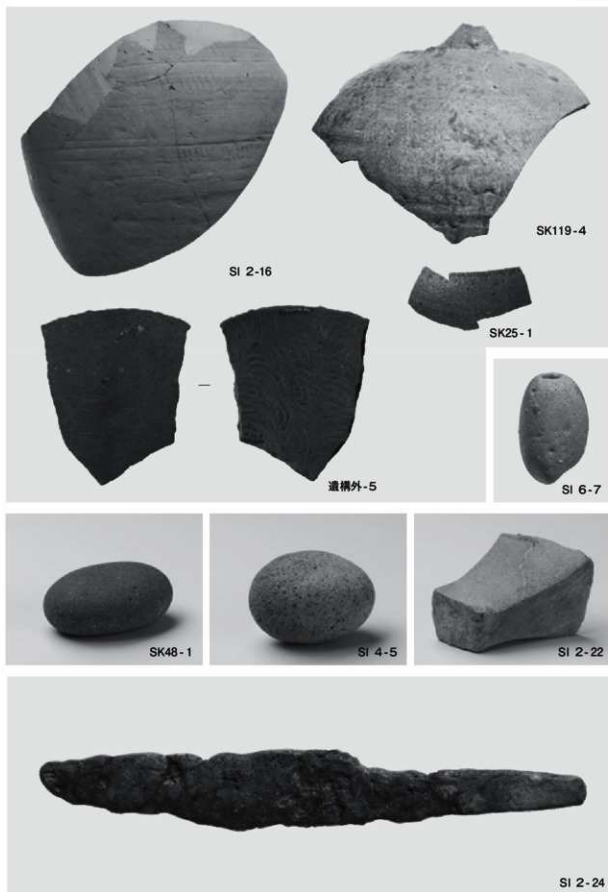
第2・5・7・9号竖穴建物跡，第97号土坑出土土器



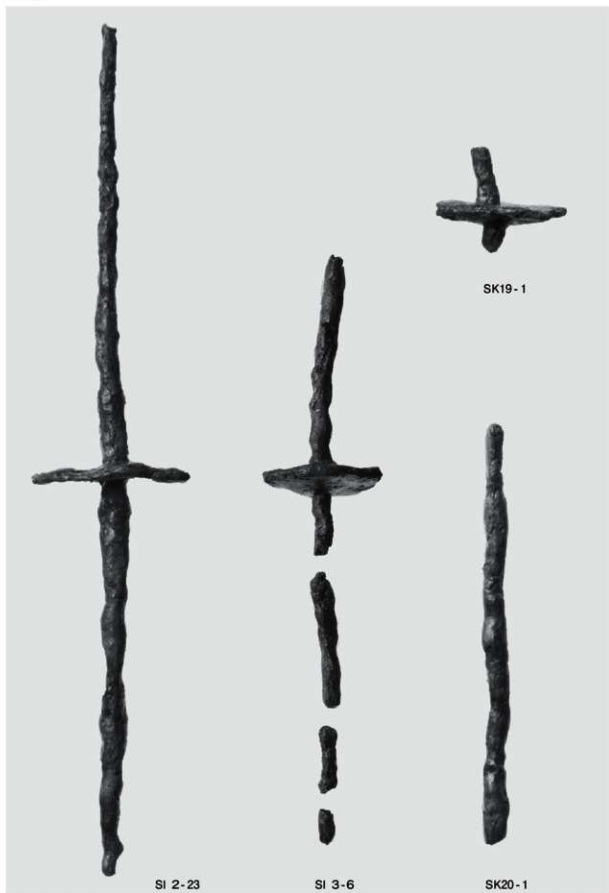
PL14



第3～6・9・10号竖穴建物跡，第6・90・125号土坑，遺構外出土土器



第2号竖穴建物跡，第25・119号土坑，遺構外出土土器，第6号竖穴建物跡出土土製品，  
第2・4号竖穴建物跡，第48号土坑出土土器，第2号竖穴建物跡出土金属製品



第2・3号竖穴建物跡，第19・20号土坑出土金属製品

## 抄 録

ふりがな	なかみちいせき							
書名	中道遺跡							
副書名	国道118号袋田バイパス道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第445集							
著者名	三浦裕介							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2020(令和2)年3月16日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
中道遺跡	茨城県久慈郡 太子町大字南田気 字中道218-1番地 ほか	08364 - 156	36度 45分 39秒	140度 22分 23秒	95 ~ 97 m	20170901 ~ 20171228	4273 m <sup>2</sup>	国道118号袋 田バイパス道 路改築事業に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中道遺跡	集落跡	平安	堅穴建物跡 掘立柱建物跡 土坑	10棟 2棟 17基	土師器(坏・高台付坏・高台付碗・ 小皿・鉢・甕・小形甕・甌)、須恵 器(甕)、灰釉陶器(短頸壺・広口 甕)、緑釉陶器(甌類)、土製品(管 状土錘)、石器(砥石・磨石)、金 属製品(紡錘車・刀子・釘)			
	その他	不明	土坑	99基	土師器(坏・高台付坏)、須恵器(甕)、 石器(砥石)			
要約	当遺跡は、10世紀前葉から11世紀中葉にかけての集落跡で、最盛期は10世紀前葉である。堅穴建物の形態は、標道部の長い竈や、東西に竈を有するもの、竈とがが伴うものなど、東北地方南部の特徴をもっている。出土した鉄製紡錘車は、製糸作業に関わる集落の性格を示す遺物として注目される。							

## 印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 10 Home
	編集	Adobe InDesign CC
	図版作成	Adobe Illustrator CC
	写真調整	Adobe Photoshop CC
	Scanning	6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000
	図面類	EPSON ES-1100G
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CCでレイアウトして入稿

### 茨城県教育財団文化財調査報告第445集

## 中道遺跡

### 国道118号袋田バイパス道路改築 事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和2（2020）年 3月16日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 株式会社あけほの印刷社

〒310-0804 水戸市白梅1-2-11

TEL 029-227-5514